

サムライサッカーをめざせ

井口和基

まえがき

1998年は、日本がそれまでの歴史上初めてワールドカップに出場した年である。中田選手がシュートし、キーパーがボールを弾き、それを岡野選手が得点したというイラン戦でワールドカップ・アジア予選突破をものにした、あの大会である。日本は初めてのワールドカップ・フランス大会では強豪アルゼンチンに0-1、強豪クロアチアに0-1、そしてジャマイカに1-2で負け3戦全敗で予選敗退した。この大会準々決勝アルゼンチン対オランダ戦で、アルゼンチンはオルテガの頭付きによる一発退場そして敗退。準決勝でクロアチアはシュケルの大活躍でそのオランダに勝ち3位となった。決勝では、前回のアメリカ大会で24年ぶり3度目の優勝をし、ワールドカップ史上初の連破を狙う闘将ダウンガ率いる常勝カナリア軍団ブラジルがエース・ロナウドを引き連れ、アンリとジダンを備えて初優勝を狙う地元フランスと戦った。ジダンの大活躍で見事フランスが3-0で勝ち、ワールドカップ史上初優勝したのである。

このフランス大会の直前に2人の偉大なサッカー選手を描いた本が立て続けに2冊出版されたのである。それが、日本を初出場に導いた牽引者の中田英寿選手を描いた「中田英寿―日本をフランスに導いた男」(高部務著、ライオンブックス、1998)と、ダウンガ自らの体験をつづった、ダウンガの自伝「セレソン」(ダウンガ著、NHK出版、1998)である。

私は2003年秋頃市内のブックオフで古本としてこの2冊と出会ったのである。まず最初に前者を買って読み、ひき続いて後者を買って読んだのである。両方の本ともに、すでに出版されてから5年を経過し、この間、日本はワールドカップ・フランス大会の後の2002年ワールドカップ日韓大会を経験していた。

この日韓大会では、日本はトルシエ監督の下に見事歴史上初の予選リーグ突破を果し、ベスト8を賭け、トルコと戦ったが、結局0-2で負けベスト16で本戦敗退した。決勝では、前回フランス大会で準優勝に終わったブラジルがロナウド、リバウド、カフィー、ロベルト・カルロスを擁し、再び優勝を賭け、ワールドカップ・ドイツ大会の前哨戦と見なして挑んできた鉄壁のゴールキーパー、カーン率いる新生ドイツと戦った。そして再びブラジルがロナウドの大活躍で優勝したのである。

私はこれら2冊の本を読んでいくうちに、そのフランス大会直前にダウンガが書いていたことが、次々と歴史の中で目のあたりになる、という驚くべきことに気付いたのである。まさしくダウンガの預言と呼んでも良い程にダウンガの分析は的を射ていたのである。どうして日本はフランス大会で予選リーグ敗退してしまったのか。次の日韓大会では、どうしてブラジルが再び優勝できたのか。どうして日本は再び最大のチャンスを生かせず、同じ過ちをくり返してしまったのか。こういったことを全て1998年フランス大会直前にダウンガは分析していたのである。

私はどうしてもこれを述べておかずにいられなかつたのである。ドウンガの分析と数々の提案には、我々日本人がはつとさせられること、どうしても耳を傾けなくてはならないこと、決して無視してはならないこと、などが満載されているのである。ドウンガの言説は単にサッカー論に留まらない。むしろサッカーを通じた日本人分析である、と考えることのできるのである。サッカーのルールは世界のどこでも同じであるが、サッカーはその国の国民性の反映である、とよく言われる。それゆえ、サッカー論はある意味で国民性を論じる社会学のようなものと見ることもできる。まさしくドウンガはサッカーを通じた日本人論を行っていたのである。

私は最初この分析を私個人のインターネットBBS上に自分自身のための日々の覚え書きのようにして書き留めていったのである。それらを基にしてより読みやすくしたものが、本書である。より理解しやすいように、言葉の使い方や配置などを多少変えている。本書によつてサッカー自体の魅力、またサッカー選手自身の知的な面、こういつた部分にも理解が及ぶことを私は願っている。たかがサッカー、されどサッカー。サッカーは単なるスポーツではない、というドウンガの言葉の意味は非常に深いのである。

目次

まえがき

第一章 中田英寿―日本をフランスに導いた男
時代が人を作るか？人が時代を作るのか？
クールガイ中田

第二章 ドウンガの「セレソン」
セレソンの目次

第三章 ワールドカップ
ワールドカップ出場の意義は限りなく深い
グラウンドの中には友情など存在しない
驚くべきシナリオを準備せよ
勝つべき試合を落とした日本
土壇場で正しい危機感を持つチームに変身した

イランの決定的チャンス忘れてはいけない
アウェーに弱い選手は使えない
日本人はコミュニケーションが不足している
外国からもう学ぶことはないのか
グラウンドの外だけのアイドルはならない
基礎があるから高度なプレーは生まれる
いま必要なのは謙虚さだ
セレソニー闘将ダウンガの日本人論
アウェーの意味

第四章 競争

私はサッカーの星の下に生まれた
人生のすべてを学んだ寮生活
当時の技術は生涯で最高だったかもしれない
競争の中でしか芽生えない友情もある
プロになるよりプロであり続けることのほうが難しい
ボランチの役柄に心を奪われた

私のサッカー遍歴はこうして始まった

イタリアではポジションニングがより重要性を増す

海外でプレーするなら自らを変えなくてはならない

カルチヨの国が教えてくれたこと

「組織的」なサッカーとは何か

2003年9月17日の日韓壮行試合

第五章 ブラジル代表

セレソン、その響きは私を魅了した

チャンスは一度しかない

ゼローニと呼ばれて

90年の代表には何かが出来ていた

執拗な批判、中傷がもたらしたもの

優勝か、さもなければ死を

問題を先送りしてはならない

グループの代表として成し得たこと

我々は手をつなぐことで団結をアピールした

7月4日、あらゆる困難を乗り越えた日
激戦の合間にはリラックスを心がけた
誰もロベルト・バツジョを責めることはできない
名声を手にしても私は私であり続ける
ワールドカップ・アメリカ大会決勝ブラジル―イタリア戦、そしてその後

第六章 ニッポン

来日の動機と新たな目標
磐田の街が私を迎えてくれた
なぜ年長者に遠慮するのか
日本の選手は考えるスピードをあげるべきだ
向上心がなければ生きていく意味もない
責任とはチーム全員が共有すべきものだ
生き残りをかけた戦いがいま始まる
真面目すぎるのも考えものだ
試合中、私は何を叫んでいるか
日本の教育はマリーシアを許さない

マリーシアの欠除

第七章 Jリーグ

トレーニングは試合を想定して行うものだ

執拗に繰り返すことで選手は成長する

練習はプレーを完成させるためにある

すべての犠牲は優勝によって報われる

チームという共同体のなかで子供は大人になる

日本に異文化の波が押し寄せ寄せる日も近い

過去は唯一、博物館の中で生きている

私は欠点を見過ごせない

第八章 キャプテン

私はJリーグの代表でもある

日本はもっと欲を出さなくてはいけない

フランスに向けての戦いが始まった

控えの選手も重要な戦力だ

キャプテンは医者のようなもの

誠実さはキャプテンに不可欠な資質である

日本の選手には気合いが足りない

権利と義務は表裏一体だ

トライもせずに犯したミス、それは汚いミスだ

生きるものと生きながらえるのは違う

すべては神のみぞ知る…

サッカーの話は尽きないけれど

あとがき

第一章 中田英寿——日本をフランスに導いた男

時代が人を作るか？人が時代を作るのか？

かつて勝海舟は氷川清話の中で言った。

「歴史を変えるような人物は百年に一人、いや二百年に一人の割合でしか生まれえない。」
この言葉はいつたいうことを述べているのか？どういう意味のことなのか？今日久しぶりにブックオフで見つけた本が、ちょうどこの海舟の考えを証明しているように実に面白い。それが、「中田英寿―日本をフランスに導いた男」（高部務著、ラインブックス）という本だ。

御存じのように、中田選手はすでにイタリア・セリエAのスター選手の一人にランクされているほど、日本人選手を超えたレベルの「世界の中田」に育っている。これまで日本から海外へ行き、大成功したサッカー選手は後にも先にも20年ほど前に奥寺選手が1人いただけだ。しかし、国内外での奥寺選手の知名度はそれほどでもなかった。ちょうど大リーグ挑戦における野茂英雄選手の前の村上選手のようなものだ。この意味で、中田選手が初めてヨーロッパサッカーに本格的に渡った選手の第一号ということになる。後にも先にも名実ともにこの「世界のナカータ」以上の選手は日本サッカー界には一度も現れてこなかった。この意味では、文字どおり、中田選手は百年に一度の選手、歴史を変えた選手である。この中田選手がどのようにして現れたのか？その秘密や状況をこの本は見事に描いている。実に素晴らしい本である。

中田選手が生まれたのは1977年。遡ることその数年前、私は当時の山梨の高校サッカーを代表する選手の1人だった。この時代がどのようなものだったかについては、私の自伝「歩むもののない道」

(<http://www.stanet.ne.jp/kazumoto/jidenIndex.html>)

に書いた。そこにあるように、まだ「リーグも生まれるはるか以前だった。この時代に中田選手の父親の中田邦彦氏が生きている。その本によると、この父親のスポーツ観と私のスポーツ観はあまりに一致しているので驚くばかりである。以前から中田選手に見られる特徴の多くが私が現役時代に選手として持っていた特徴と非常に似ているので驚いていたのだが、その理由がこれだった。つまり、私と同じ時代背景に生まれ、私と同じような考え方を持つ、この父親の下で中田選手は育ったということだ。

中田選手の特徴と言えば、頭の良さ、自由奔放な性格、ゴーイングマイウエー、自己主張の強さ、リーダーシップ、骨太な体型、基礎体力の強さ、肉体プレーよりは頭脳プレーを好む、などなど。実は、私の自伝とこの本を読み比べると実に良く分かるだろうが、これらほとんどすべてが私とまったく同じ性格であると言えるのだ。

例えば、私は20年前の甲府南高校時代、先輩後輩の垣根はサッカーには無用である。むしろ邪魔になる。だから、「フィールド上では名前に『さん付け』はいらぬ」と考えていた。もちろん今、中田選手もまったく同じことを行っている。私は高校時に1000

回以上のボールリフティングが出来た。もちろん中田選手もそうだった。私は現在でも4000回できる。他にも似た例は数知れない。

さて、私がサッカー選手だった頃、山梨県のサッカー界には大きな問題があった。それは選手のレベルは高校生時代には隣県の静岡に負けず劣らず非常に素晴らしい選手がいるのだが、どうしても全国レベルの選手が育たないという問題だった。これには1つの理由があった。それは山梨のサッカー選手は一般に頭が良く、まだJリーグのようなプロサッカー組織がなかった当時は、選手のほとんどが大学へ進学してしまい、いずれは途中でサッカーを止めてしまうという問題だった。だから、いくら高校生時代に上手な選手であったとしても、将来釜本選手や杉山選手のような全国レベルの選手が育たなかったのである。もちろん、私もその例にもれない。

ところが、中田選手が育った時代は違った。それはちょうど日本サッカー界がワールドカップ出場を目指して、本格的に長期的戦略を練り始めた時に重なっていたのである。そして、日本サッカー界の悲願の夢、そうワールドカップ出場目指して、ワールドカップ招致に全力を掛けている時代であった。そのために、まずJリーグを設置し、2002年に日韓ワールドカップを招致することを目指したわけである。この時代背景と中田選手の選手としての成長過程がまさしく合致していたのである。

中田選手は、U15、U17、U19、ワールドユース、アトランタ・オリンピック、ワールド

ドカップ・フランス大会、日韓ワールドカップとそのすべてに代表の一人として参加した。これらのチャンスをとことくものにしてきた日本サッカー史上初の選手である。これらのすべてが、実は日本サッカー界の大きな変革のうねりとまさしく一致したのである。これが中田選手を世界の中田に押し進める原動力となったのである。

では、なぜそれが可能だったのだろうか？なぜ中田選手だけがすべての代表に選ばれたのだろうか？それは、次のようなことである。中田選手よりうまい選手ならもつとたくさんいる。ヘディング、シュート、走力、などあらゆる面でその一つ一つだけを取り出せば、中田選手よりすぐれている選手は他にもたくさんいる。しかし、ここぞという時の輝き、頼りの大きさ、存在感、こういったもので中田選手以上の選手はいない。だから、チームの精神的支えとして中田選手は欠かせない、ということである。そして、どの世代の代表チームであったとしても、不屈の精神で不利な局面を打開していく中田選手のこうした力が必要だったのである。

この違いはどこから来るのか？何の差なのだろうか？実はこの問題こそ、山梨サッカーの伝統から来ている、と私は考えるのだ。質実剛健な精神、スピード感、溢れる知的なプレー、こういったものが山梨サッカーの魅力である。中田選手の持つヨーロッパ的なプレースタイルは、かつてこの地にあった武田信玄公の風林火山をも彷彿させるものである。気候が温暖な静岡の南米ブラジルの個人技的なサッカーとは違う。一撃必殺のさむらいサッ

カー。これこそ甲斐の国のサッカーと言えるだろう。

偉大な人物はどうやって育つか？これは古今東西の秘密である。今だ説得力ある説明はだれにもできない。それは時代が人を選び、育むようにも見える。また、人が新しい時代を己の力で切り開いたようにも見える。しかし、現実には双方が絶妙に絡み合っているものだ。中田選手の場合もその例にもれない。この意味では、野茂選手の前には二度と野茂選手が現れないように、中田選手の前には二度と中田選手は現れないのかも知れない。こんなことを考えさせてくれる本であった。

クールガイ中田

ついでに書くと、この本「中田英寿―日本をフランスに導いた男」は、1998年、今から5年程前に書かれ出版されている。ちょうどフランス・ワールドカップが始まる直前である。その後、中田選手が昨年2002年の日韓ワールドカップでどれほど活躍したかは皆さん良く御存じのことだろう。この本の最後で著者の高部務氏は言う。

「そう考えて、ここまで筆を進めてきた。

いかなる場合においても、沈着冷静な判断でプレーをし、自分の生き方をかえようとはしない中田英寿。

中田英寿という1人の男が、どんな経緯を経て、これまでのような人生を歩んできたの

かを知れば知るほど、彼の本質を、鮮明に理解することができた。

その歩みを追う中でみえてきたのは、常に強い信念を持ち、自分の道を切り開いてきた姿だった。

間違っていることに対し、正面から明解に自分の言い分を表明する。プレー、つまり自分の態度で答えをだす。『日本人』には、簡単にはできないことをやり遂げてきた一貫した姿勢。

これから先、ワールドカップでの大活躍で、ヨーロッパ各国のチームからのオファーがくることだろう。

『日本を離れ、サッカーの本場 イングランド、イタリア、スペイン、ドイツなどで華々しい活躍を見せてくれる。』

クールなハートが中田にあり続ける限り、彼は日本中のサッカーマンの、そんな夢を實現してくれるに違いない。

21歳、ワールドカップ出場。日本の救世主・中田英寿、頑張れ。」

この著者の預言はその後の5年間で着実にすべて実現したように見える。さらにはこの著者も預言できなかつたほどに中田は成長した。今やイタリア語ペラペラで、実に流暢に話す。自分のビジネスも平行して始めている。クールガイ中田。近代まれにみるスポーツマンに成長したと言えるのではないかと私は思う。

第二章 ドウソガの「セレソソ」

セレソンの目次

今、私は非常にサッカーづいてる。最近私は、「中田英寿―日本をフランスに導いた男」(高部務著、ラインブックス)を読んだばかりなのだが、これもまた最近買った同じサッカー選手、ブラジル代表主将ドウンガの自伝「セレソン」(ドウンガ著、ZENON出版、1998)という本を読んでいる。これを読み進むうちに適当に私の意見を書いていこうと思う。

さてドウンガの「セレソン」の目次を最初からまとめてみよう。

セレソン

目次

第一章 ワールドカップ

ワールドカップ出場の意義は限りなく深いノグラウンドの中には友情など存在しないノ驚くべきシナリオを準備せよノ勝つべき試合を落とした日本ノ土壇場で正しい危機感を持つチームに変身したノイランの決定的チャンスをお忘れてはいけないノアウェーに弱い選手は使えないノ日本人はコミュニケーションが不足しているノ外国からもう学ぶことはないのかノグラウンドの外だけのアイドルはいらないノ基礎があるから高度なプレーは生まれるノいま必要なのは謙虚さだ

第二章 競争

私はサッカーの星の下に生まれた／人生のすべてを学んだ寮生活／当時の技術は生涯で最高だったかもしれない／競争の中でしか芽生えない友情もある／プロになるよりプロであり続けることのほうが難しい／ボランチの役柄に心を奪われた／私のサッカー遍歴はこうして始まった／イタリアではポジションニングがより重要性を増す／海外でプレーするならば自らを変えなくてはならない／カルチヨの国が教えてくれたこと／「組織的」なサッカーとは何か

第三章 ブラジル代表

セレソン、その響きは私を魅了した／チャンスは一度しかない／ラザローニに呼ばれて／90年の代表には何かが欠けていた／執拗な批判、中傷がもたらしたもの／優勝か、さもなければ死を／問題を先送りしてはならない／グループの代表として成し得たこと／我々は手をつなぐことで団結をアピールした／7月4日、あらゆる困難を乗り越えた日／激戦の合間にはリラックスを心がけた／誰もロベルト・バツジオを責めることはできない／名声を手にしても私は私であり続ける

第四章 ニッポン

来日の動機と新たな目標／磐田の街が私を迎えてくれた／なぜ年長者に遠慮するのか／日本の選手は考えるスピードをあげるべきだ／向上心がなければ生きていく意味もない／責任とはチーム全員が共有すべきものだ／生き残りをかけた戦いがいま始まる／真面目すぎるのも考えものだ／試合中、私は何を叫んでいるか／日本の教育はマリーシアを許さない

第五章 Jリーグ

トレーニングは試合を想定して行うものだ／執拗に繰り返すことで選手は成長する／練習はプレーを完成させるためにある／すべての犠牲は優勝によって報われる／チームという共同体のなかで子供は大人になる／日本に異文化の波が押し寄せる日も近い／過去は唯一、博物館の中で生きている／私は欠点を見過ごせない

第六章 キャプテン

私はJリーグの代表でもある／日本はもつと欲を出さなくてはいけない／フランスに向けての戦いが始まった／控えの選手も重要な戦力だ／キャプテンは医者のようなもの／誠実さはキャプテンに不可欠な資質である／日本の選手には気合いが足りない／権利と義務は表裏一体だ／トライもせず犯したミス、それは汚いミスだ／生きるものと生きながらえ

るのは違う／すべては神のみぞ知る…

あとがき サッカーの話は尽きないけれど

どうだろう。実に意味深な話題ばかりであるのが分かるだろう。全部は詳しく紹介できないが、サブセクションを少しずつ読んでまとめるつもりだ。

第三章 ワールドカップ

第一章からして実に面白い。この章はちょうど中田選手を描いた上の高部氏の本と全く同じテーマ、つまりフランス・ワールドカップ出場にまつわる日本サッカーのお話がメインである。中田選手と同じくフランス・ワールドカップにブラジル代表主将として行くことが決まったダウンガが、それまでの日本サッカーを振り返ったのがこの第一章である。

ワールドカップ出場の意義は限りなく深い

ここでダウンガはワールドカップの世界における真の意味―計り知れない経済効果―について語っている。そしてその現実世界に対する日本人の無知を述べている。たとえば、ブラジルがワールドカップで優勝すればブラジルの輸出量が40%伸びるといふ事実を紹介している。これは今年阪神が優勝することでどれだけ経済効果がもたらせられた分るのでかなり分かりやすいのではないだろうか？

グラウンドの中には友情など存在しない

ここではワールドカップと普通のサッカーの違いを議論している。そして一国の経済すら影響しかなないワールドカップの試合にはいわゆる友情なんていうものは存在しないのだとダウンガは言う。

「そこではあらゆる手段を駆使して敵に勝たねばならない。」

「大袈裟に言えば、それは生きるか死ぬかの問題。自分が死ぬか、相手が死ぬか。だとすれば相手が死ぬほうが良いに決まっている。」

驚くべきシナリオを準備せよ

ここでドウंगाはワールドカップの出場決定で浮かれるのではなく、もっとやらねばならない準備をしるという。なぜなら、日本はフランス・ワールドカップ出場国では最弱の国だからだ。たとえば、アルゼンチン戦では相手に日本はよわっちい可哀相な国、そう思わせ相手を油断させておいて一撃必殺で勝つ戦略シナリオを練っておけと言う。そのためにこれまで犯したあらゆるミス进行分析して修正しておけと言うのだ。

勝つべき試合を落とす日本

ここから彼はこれまでの日本チームのアウェーの試合、ウズベキスタン戦、UAE戦、韓国戦を振り返る。この部分がちょうど高部氏のほとんど重なる部分である。日本人の高部氏は、日本をフランスに導いた中田率いる日本チームに最大の賛辞を送ったわけだ。しかし、ドウंगाは違っていた。彼は日本人にありがちな弱点を発見している。それは、日本人はすぐに相手をなめ油断するということだ。また、監督（加茂監督）の采配ミスを指摘している。そしてこの結果監督交替劇がおこった。岡田コーチが代行監督になったことだ。

彼は言う。

「こういう状況のときにはまず冷静になり、自分達のリズムを取り戻すまでは確実なプレーをしなくてはならない。与えられた自分の役割を軽く見てはいけない。」

土壇場で正しい危機感を持つチームに変身した

ここでUAE戦、韓国戦、カザフスタン戦を振り返る。全試合を通じてあまりにミスが多いことを指摘。

イランの決定的チャンスを忘れてはいけない

そして最後のイラン戦。そう、中田がシュートしてキーパーがはじき、最後に岡野がゴールを決めたあの1戦だ。この試合に対してもドウンガは厳しい。まず日本人は勝てると思うとすぐに油断するという性質のために、集中力が切れると彼は言う。その性質のおかげで再三のチャンスを落とす、逆にを2点を決められリードされた。そして同点に追い付き、最後に例のシーンに行き着く。ここで彼は言う。

「真剣な国際試合ではシュートチャンスはせいぜい2、3回。こうした貴重なチャンスを逃せば勝てる試合などない。」

アウエーに弱い選手は使えない

ここで日本人に共通した特有な性格や問題点を指摘している。第一は、テクニックや戦術の差ではなく、国際経験が少ないという問題。国際試合、それもアウエーの経験を多くし、アウエーで活躍できる選手だと指摘する。第二は、日本人は見栄えの良い、カッコいいプレーや難しいプレーばかり練習し、基礎的な実践的練習を怠る傾向があると言う。マークのしかた、ディフェンスのしかた、からだの使い方、シュート練習、こうした練習が足りないと彼は言う。

日本人はコミュニケーションが不足している

ここから彼の日本人論が始まる。日本人の共通した性格を見抜いている。

第一は、日本人は他人にストレートに話をすることをためらう。

第二は、文句は言うべきときに言わねばならない。

第三は、監督であれだれに対しても率直に意見せよ。

つまり、相手がどんな年令であれだれであれ、試合に勝つには声を出し、怒鳴り、時には侮辱してもかまわない。微笑むのはグラウンドの外の話だと言う。しかし、高部氏の本にある通り、中田選手が日常的にやっていることだ。これが当然だとダウンガは言っているのだ。

外国からもう学ぶことはないのか

日本人のメンタリティーに関してどうしても言っておかないといけないことがあるとドウンは言う。

「日本人は間違いを見つけてもなかなか変えようとしなくていいところがある。私はどうしてもこのことが我慢できない。」

外国人にとつて誤りがあつたらすぐに別の方法を試みる。その問題を明日、明後日、来週に持ち越すことはない。これぞまさしく日産のゴーン社長といっしょだ。ゴーン社長の言うところのコミットメントである。さらに彼は付け加える。

「私の数少ない経験では、日本人はほんの少しのことを覚えると、もうすべてを理解したような気になってしまうことがある。サッカーは常に学習を続けていなければならぬ。絶対にはなならない。絶対に立ち止まることは許されない。私はそれは人生に似ていると思う。」

これは日本人が日本人監督、つまり岡田監督でワールドカップ出場を果し、日本人がそれだけでいい気になっていることを非難した部分のことだ。

グラウンドの外だけのアイドルはいらない

ここでドウンは日本人監督に見られる共通の資質を議論する。

第一は、選手起用の問題。

第二は、トレーニングの問題。

この最初の問題をここで議論する。つまり、日本人監督は選手の真の力量ではなく、イメージで選手起用をしているということ。過去の貢献度とか人気とか評判とか、グラウンド外の私生活面とかこういうイメージで人を選ぶということだ。これは間違いだと彼は言う。ましてや、中田など海外でプレーしたい選手に必須の条件があると言う。それは、

「もし本当に海外でプレーしたいと思うなら、相当強固なパーソナリティーを持たねばならない。」

つまりあらゆるプレッシャーに打ち負けないだけの精神的タフネスが必要だということだ。そして、付け加える。

「日本人が外国に行ったとき、問題になるのは外国の生活、習慣、文化に対応できる準備ができているかどうかだろう。日本で身に付けてきた生活や習慣を変えてしまうことを受け入れられるかどうかだ。日本で振る舞っているときのそのような態度、物腰はまったく通用しない。」

基礎があるから高度なプレーは生まれる

そして第二の問題に戻る。ここでダウンガはサッカーの奥義を述べる。それは、サッカーの試合の90%は基礎的なプレーで出来ているということだ。だから、ロングパスの練習

よりはショートパス、難しいプレーよりは簡単なプレー、かっこいいプレーよりは地味なプレー、こうした基礎練習がより高度なプレーを生むのだと言う。しかし、日本人監督は、離れ業を好むと彼は見抜いている。彼は言う。神様ジーコの離れ業も彼のプレーのせいぜい2、3%にすぎず、ほとんどが地味な基礎プレーである。しかし、この部分を日本人は見ない。

いま必要なのは謙虚さだ

そして最後に彼はきたるべきフランス・ワールドカップのことを議論する。ここでワールドカップに初出場が決まった程度で浮かれるなど指摘。オリンピックでブラジルに1勝したくらいで浮かれ、ワールドカップで優勝などと考えるな。日本人に必要なことは現実を見据えた謙虚な気持ちであると彼は言う。むしろ、これまでに犯した数多くのミスをチェックし、試合直前まで用意周到に最大限の準備をせよというのが、このフランス大会前のアメリカ大会で優勝を遂げたブラジルの闘将ドウンガの日本人へのアドバイスだった。

最後に彼は言う。

「それは、ワールドカップがただサッカー界最大のイベントだからではない。ワールドカップが日本という国を世界に知らせる絶好の場だからだ。もしワールドカップがなければ、ブラジルのことを知らない人は多かつたはずだ。その重要性を日本代表の選手たちは

まだ理解していない。」

セレソニー―闘将ドウンガの日本人論

これを見て、どうして日本選手では中田英寿選手だけが最初にヨーロッパに飛び経つことができたのか分かっただろう。つまり、ドウンガの言葉で言えば、中田選手だけが、その精神性から語学からあらゆる意味でヨーロッパで活躍するための準備を行い、なおかつドウンガなど海外の超一流の選手だけが持つ精神、行動、考え方を身につけるように努力してきたからだとも言えるのではないか。すくなくとも、ここに書いたドウンガの挑戦のような事柄を中田はこれまでの人生で自分自身で真剣に受け止めて自己研鑽してきたことだけはまず間違いない。だからこそ今の世界の的中田が存在するのだ。私にはそう見えるのだ。

一方、ドウンガのこれらの言葉は単にサッカーのお話だけに留まらないと私は思う。科学者世界であれ、野球であれ、柔道であれ、プロフェッショナルと名のつく職業にはすべて同じことが言えるのではないか。ちよつと勉強するとすぐにでも世界の最高の知識を見つけてしまったと錯覚する学生。1つ2つ論文を出したら一流の研究者気分になる日本人の若手研究者などそこら中にある。ドウンガの言葉の数々は、こうした日本人特有の性格を見事に描き出していると私は思う。

私はこれほど現代日本人をうまく表現したものはこれまで読んでことがない。それほどまでにダウンガのコメントは的を射ている。その意味では、立派な日本人論としての価値があると私は思う。

私はすでに「セレソン」を全部読み終えたのだが、実に素晴らしいので（つまり、本物の考え方とはこういうものだということを見せてくれるので）、書くのはたいへん骨折れる作業なのだが、少しずつ全部の章についてもまとめて、その都度私の意見やコメントも加えてみよう。若いサッカー選手、若い研究者など、プロフェッショナルを目指す人間には必見の書物の1つである。

アウエーの意味

さてここでちょっとサッカー選手ダウンガの言う「アウエー」の意味について補足しておこう。

サッカーの国際試合はホーム（自国）とアウエー（他国）のどちらかで行われる。予選では俗にホームアンドアウエー方式と言って、自国で1試合、敵国で1試合で得失点差で勝負を付けるというのが一般的である。この場合には、アウエー戦では、旅行日程が苛酷であったり、自国とはまったく違った文化環境であったり、さまざまなことが要因になってホームゲームより非常に難しい試合になる。したがって、普通の選手はアウエーでは自分の力を出すことが非常に難しくなる。

だから、アウエーで活躍できる選手が良い選手なんだとダウンガは言う。また、ワールドカップやオリンピックなどの大会はほとんどがアウエーの試合になる。それゆえ、アウエーで活躍できる選手を代表に残さなくては行けないと彼は言うわけだ。実にもっともな意見である。

実は、このダウンガの本や高部氏の本が話題にしたフランス・ワールドカップの後、日本の代表監督はあのトルシエ監督になった。みんな良く御存じだろう。このトルシエ監督になってナイジェリアで行われたワールドユースにつれていかれた選手たちが、高原、小野、稲本、明神、宮本、中田浩、坂井、永井、などの選手たちであった。この辺りは私の

本「ワールドカップ2002」（太陽書房）に書いてあるので御存じの人もいるだろう。

結局、彼らはこの国際経験の場で準優勝をした。この経験が財産になって彼らはその4年後、つまり昨年の日韓ワールドカップの代表に入ってきたわけだ。まさに、5年前のドウガの預言がそのまま生きていたと言えるだろう。そして、高原、小野、稲本などは中田の次の世代の選手としてヨーロッパクラブに入団したわけだ。これが、ドウガの言うアウエーに強い選手が良い選手だという意味である。

さて、翻ってサッカー以外の分野ではどうか？例えば、科学者世界では同じことが言えるだろうか？私は個人的には、多少の状況の違いがあるにせよ、全く同じことが言えると思う。科学者世界では、アウエーとは海外で仕事することだ。ホームとは国内で仕事することだ。言語、環境、制度などあらゆるものが日本と異なるアウエーで良い仕事する人は良い科学者だと言えるだろう。

もちろん、国内で良い仕事しても結構なんだが、やはり同じような成果を残した人を比べた場合には、アウエーに強い科学者の方がより優れていると考えるべきだろう。ただ、科学の場合には、知識は共通財産になるから、日本のホームで得た知識だから価値はないというようなものではないだろう。しかし、科学の結果もさる事ながら、それを行う人間を見れば、やはりアウエーで結果を残した人にはそれなりの理由と言うものがある。それは注目する価値あると私は思う。

こうしてみれば、白川さん、野依さん、利根川さん、江崎さん、中村さん、など、近年良い仕事を残した人々はまたみんなアウエーでも良い仕事をしてきた人々でもあるということが分かる。やはり、昔からあるように、可愛い子には旅をさせよ。アウエーの経験は生涯の財産になるということだろう。

第四章 竞争

さてドウンガの第二章をまとめてみよう。この章「競争」でドウンガはプロとはどういうものかということを読者に語っている。またこの章から第一章で日本サッカーに対するコメントがすべてドウンガのこれまでの個人的な体験から得られたものであることを彼は示している。

私はサッカーの星の下に生まれた

ここで彼の生まれたブラジルの地方、リオ・グランデ・ド・スル州の話から始めて、自分の幼少期の生い立ちを語っている。特に、自分が生まれたときに非常に小さな赤ん坊であつたために、自分にサッカー選手になつて欲しいと強く願っていた父がこれではサッカー選手は無理だと残念がつて、白雪姫の7人の小人の1人の名前ドウンガというニックネームを付けたのだと言う。

また、以前日韓ワールドカップ本で書いたように、フランスのサッカースクールの選手が「壁打ち」を練習日課にしていたように、家の前の23mの高さの塀にむかつて毎日ボールを蹴っていたと言っている。このように、壁打ちがどれほどサッカー練習に良いか分かるだろう。また、中田選手についての高部氏の本にあるように、ドウンガも身体こそ小さかつたが極めて骨太な体型だつたとある。

母は大学進学を望んだが、彼は

「文化を実践の中で学びたい。つまり、サッカーをしながら世界を回りたいんだ。」
と言って説き伏せたのだと言う。そして、これがその後厳しいブラジルのサッカー界を生き残って実現していったということになる。しかし、この頃はサッカー選手になることはブラジルならだれしもが望む夢で本当にそうなるかどうかはまったく分からなかったと彼は述べている。

人生のすべてを学んだ寮生活

ここでダウンガは全寮制のサッカースクールに入ってからのことを語る。ポルト・アレグレ（リオ・グランデ・ド・スル州都）には、グレミオとインテルナシヨナルの2つのクラブがある。そこでダウンガは、彼の親はグレミオの選手だったことがあるのだが、比較的若手にもチャンスを与える傾向のある後者のインテルナシヨナルに入った。そして、何とかこのユース（ここでは、U15のインフアンティール、U17のジュベニール、U20のジュニオールと3つのレベルがある）を生き延びて最後にクラブ代表に選ばれていくまでの苦労が述べられている。そして、最後に、彼は言う。

「たとえどんな劣悪な環境の中においてもそれを乗り越えなければならないということだ。」

これは、U17日本代表時代にチームメイトであった中田英寿と財前選手のチーム選択とその後の人生の差を彷彿させて実に興味深い。有名クラブの読売ヴェルディに鳴り物入り

で入ったのは財前。ちょっと落ちるが若手主体のチーム湘南ベルマーレを選んだのが中田。ところが、すぐにレギュラーに入ったのは中田で、なかなかレギュラーになれなかったのが財前だ。この結果、中田は有望な若手株と頭角を表したが、天才財前は忘れ去られた。ここに若手の伸びるための王道があると私は思う。

古来中国にもあるように、「牛尾鶏頭（ぎゅうびけいとう）」、つまり、大組織のどん尻につくよりは、小さな組織のトップにつけていうことだ。そうすれば、例えその組織が知名度で落ちても、トップにいる有望な若者ということで、衆目の注目を得ることができるということだ。ところが大組織の中では相当な若者でも目立たず意気消沈し、魚の腐った目になるとも限らない。つまり、ダウンガも中田も弱小チームであってもそのトップとして孤軍奮闘する姿が衆目の注目を引いたということだろう。若い諸君、ぜひこの事実を肝に命じよう！これは古今東西の真理の1つであるからだ。今や天才財前を知る人は私ぐらいのものだろうね。

当時の技術は生涯で最高だったかもしれない

ここでダウンガは「勝利への執念」がいかに大事なものであるかを説いている。むかしペレがシルベスター・スターローンと共演したサッカー映画にこんなタイトルのものがあつた。ナチス代表の收容所チームと連合軍代表の捕虜チームが戦い、幾多の反則にもめげず

最後には勝利をおさめるという内容だった。

「勝ちたいと強く望む意志が重要なのは、サッカー選手だけではなく、プロフェッショナルと呼ばれるあらゆる職業においても同じなのではないかと私は思っている。」
と言い、

「そのころのチームには、私より間違いなく良い選手、素質に恵まれた選手はいたが、私ほど決意が強く、固執し、永続を求め、堅実な者はいなかった。」

と語っている。そして、この頃にはものすごいトレーニングをし、身体と技術を鍛え、自分の技術は両足も使え、あらゆる意味で最高の技術を持っていたのではないかと語っている。しかし、プロになる難しさについても語っている。つまり、いくら自分に準備整っていてプロになりたいと思っても、チャンスは予想もなく訪れるということだ。

「要するに、いつプロに上がれるかなんて、選手にはまったく予想できないものなのだ。」

競争の中でしか芽生えない友情もある

ここで、ダウンガは、我々日本人の言葉ではいわゆる「切磋琢磨」ということの意味を述べている。U18、U20レベルになるとますます競争は激化し、練習も厳しくなる。そして

「この年代の選手では、プロになれるか否かという、大きなプレッシャーに苛まれる。」

「だからこそ、1回1回のトレーニングは戦争だった。常に集中して、自分が監督を満
足させているかどうか確かめていた。単に監督の、その選手を気に入る、気に入らないと
いう感情で決まってしまうこともあるからだ。トレーニングだけではない。生活をコント
ロールして、できる限り体調を良い状態に保つように注意していた。」

これこそ、ダウンガのダウンガたるところだ。三浦カズも中村俊介も実は選手としての
能力ではなく、単に岡田監督やトルシエ監督の好みや感情のためにワールドカップ出場を
逃したのだ。ダウンガは、監督も人間だ、好き嫌いはある。しかしもし本当に出場したい
のなら、その監督ですら満足させるように努力すべきものだと言っているわけだ。

しかし、こうした真の競争の中で本当に素晴らしい友情が生まれるとダウンガは言う。
これが日本で言う「同じ釜の飯を食った友」というものだろうね。
さて、この中で1つだけ見のがせない記述を私は発見した。それは、

「私達はそれぞれのポジションで、ベストを尽くした。と同時に私は、ただひとり目立つ
て競争から抜け出すことよりも、お互いに協力し合ってチームが試合に勝つことを優先す
べきだと考えるようになった。」

という部分だ。(ダウンガの後のすべての記述の中心はここから始まる。つまり、いかに
チームとして勝つかが中心テーマとなるわけだ。)

私はこの部分が中田とダウンガの大きな違いであると思う。中田は個人的には素晴らし

いプレーをする。しかし、試合は負けるといふものが非常に多い。そのため、高校サッカー優勝、U15, U17, U20, オリンピック、Jリーグなどにおいてもあまり優勝にはからめない。もちろんセリエAのローマ優勝経験もある。だから他の選手のレベルが中田についてきていないことも大きな理由だろう。

しかし、方やドウンガは、ユースからワールドカップまでほとんどで優勝ないしは準優勝している。Jリーグでジュビロ磐田を初優勝チームに導いたのもドウンガであった。この本の後に開かれたフランス・ワールドカップでもドウンガ率いるブラジルが準優勝したのはみなさん御存じだろう。

この差はどこから来るか？私はそこが知りたかった。この理由が、中田にはチームに対する「献身」がないがドウンガにはある、という差なのだと思ふ。この差は一見小さなものなのだが、これが積み積みもって大きな結果の差になって現れるというわけだ。この「献身」の意味はいったい何か、それは本を読んで欲しいところだね。

プロになるよりプロであり続けることのほうが難しい

ここでブラジルのサッカーの若手プロ選手の生活とはどんなものか述べている。ドウンガは17歳でプロになった。なり立ての頃はプロといっても

「サッカーのために生きているような毎日だった。」

と彼は言う。

「毎日のトレーニングは私にとっての試練であった。なぜならきちんとトレーニングをして、体調や精神的な準備をしたうえで試合に臨めば、それだけ良いプレーをすることができる可能性は高くなる。現在と同様、私は負けることを好まなかった。」そして、最後に

「つまり、自分のサッカーを完成させなければならぬのがこの時期なのだ。」と述べている。この18歳で彼はレギュラーになった。

ボランチの役柄に心を奪われた

ここではいわゆるブラジルのボランチの意味を説明している。「ボランチ」とは、別名「グラウンドの頭」の事だと言う。このボランチの意味は時代とともに変化し、最初は攻撃の選手をマークするポジションだったが、次第にゲームメーカーとなり、最後にはその両方を行うようになったのだと説明する。

私のサッカー遍歴はこうして始まった

ここでは、ダウンガの経歴をまとめている。17歳でインテルナショナルのプロになり、ロスオリンピックで準優勝して21歳でイタリアのフィオレンティーナに所属。そこでレ

ンタル移籍でブラジルのコリンチャンス、サントス、バスコダガマ。そしてフィオレンティーナに入団した。

イタリアではポジションがより重要性を増す

ここでドウンガはイタリアの5年間を振り返る。イタリアではサッカーを「カルチヨ」と呼ぶ。このカルチヨの国イタリアサッカーとブラジルサッカーの違いを説明する。イタリアサッカーはパワーが特徴だと言う。

一方、ブラジルでは

「人はあまり走ってはいけない。走らなければならないのはボールだ。」

「ボールは汗をかかないし、疲れない。」

というわけだ。そしてそのためには効率的なポジションニングが大事だとドウンガは言うわけだ。

実はこの考え方が身体能力に乏しい日本人にはブラジルサッカーが向いていると考えられる大きな理由だ。私はそう思う。ボールを回す。そして組織力で戦う。これが日本サッカーの理想だろう。フィジカルで勝負するタイプのサッカーではまず勝ち目はない。事実、ジーコの鹿島アントラーズ、ドウンガのジュビロ磐田などブラジルサッカーが根付いたチームが日本では強くなっている。他にはアルゼンチンサッカーを下にした、横浜マリノスや

清水エスパルスなどが強いのもある程度うなづけるだろう。

海外でプレーするなら自らを変えなくてはならない

ここでドウंगाはイタリアに渡ったブラジル選手でも成功する者とそうではない者がいて、成功する者にはそれなりの理由があると説く。ちょうどこれは、イタリアへ渡った日本人選手でも中田のように大成功する者もいれば、三浦カズや名波のように失意とともに帰国するものもいるということを説明している。この差は何か原因かと言うことをブラジル選手を例に説明している。

「それはけっしてフィジカルの問題ではなく、その選手がブラジルを出るまでに準備ができていなかったからにちがいない。準備とは物の考え方、つまりメンタルの問題だ。」

イタリアであれば、たとえサッカーの先進国のブラジルのサッカー選手であつても必ず成功する保証はないのだと言う。というのは、イタリアとブラジルでは文化から何から何まで違う。特に外国人には信じられないほど厳しく評価し、試合に勝てば良いが、負ければその責任はすべて外国人のせいになる。それは、自国人の職を奪った外国人の代償であり、それが責任だとドウंगाは言う。だから、この猛烈なプレッシャーに打ち勝つだけの精神力のある選手だけが実力を発揮できると彼は言う。つまり、日本人で例にとれば、ナイーブな三浦カズや名波や中村よりは個性と自己主張の強い中田の方が成功する確率が

高くなるというわけだ。

いずれにせよ、コミュニケーションをとったり、イタリアの文化に慣れたり、あらゆる努力を行わない限り、成功はつかめないのだとドウンガは説明する。

カルチヨの国が教えてくれたこと

ここで、ドウンガはカルチヨの国が、真のプロフェッショナルとは何かを教えてくれたと述べている。

「私は、直面した問題を乗り越える能力のある人間になりたかった。私は障壁を越えられる何者かになりたいと思っていた。」

つまり、ドウンガにしてもイタリアで失敗してブラジルに帰るのは絶対にしなくなかったということだ。そのためにはできる限りの努力をしたとドウンガは言っている。

「たとえば、イタリアのサッカー界は非常にプロフェッショナルリズムが強く、選手は常にプロフェッショナルであることを要求される。多額の年棒が支払われるぶんだけ、自分で多くの事をコントロールしなくてはならない。もし年棒をあげたかったら、グラウンドの上で結果を残さなければならぬ。最高のパフォーマンスを見せない限り、スポンサーがついたり広告に出たりすることなどあり得ない。」

「試合に破れて酷評されたからといって、泣いても仕方ない。厳しい評価にも、建設的

な批評とただの中傷と2通りあるが、本当はどちらなのかを判断して、それがもつともな意見だったら素直に従うしかない。」

「だがもつとも重要な批評は自分自身によるものだ。本人はいつ、どこで、どんなミスをしたかを知っており、それを隠したりごまかしたりすることはできない。ミスをしたと言ふ必要はないが、それは本人が一番良く分かっている。他人の批判に対しての言い訳を考えたところで仕方ない。そんな余裕があつたら自分のミスの原因を考えることだ。」

いやー、ドウंगाは良いことをいう。日本のサッカー選手もこれらのドウंगाの言葉を良く理解して欲しいものだ。

また、これらはサッカーに限らないことは明らかだろう。プロというもの、それなりの給料をもらう以上、それに対する責任と義務があるのだよ、ということを下ウंगाは言っているわけだ。良い給料は欲しい。しかし良い仕事をしないではそれはプロとは言えないということだ。どの世界にも給料をもらえるのが当然だという職は存在しない。

それは大学院生であれ同じことだ。もしスカラーシップをもらうのであれば、当然、仮にその給料が安かったとしても、それに応じた責任と義務というものが現れるわけだ。インターネットのチャット掲示板で愚痴をこぼして済むというものでも、のみ屋でウサをはらして済むというものでもないはずだ。ドウंगाは言う。

「プロ魂はむしろ逆境の中でつちかわれるものである。」

「組織的」なサッカーとは何か

この章の最後で、イタリアからドイツに渡ったドウンガの話がまとめられている。ドイツではシュツットガルトに入った。ここには後に浦和レッズを強力チームに仕上げた鉄人ブッフバルトがいた。このチームの中盤にドウンガが抜てきされた。この当時ドイツサッカーに渡ったブラジル人はたったの3人。後に鹿島アントラーズでプレーしたあのジョルジーニョとチッタという選手とドウンガだけだった。

この経験を通じて、ドウンガはサッカーには個人プレー的サッカーとか組織的サッカーとかのステレオタイプの区別は無意味だと言っている。つまり、個人プレー的なサッカーがブラジルサッカーで、組織的なサッカーがドイツサッカーだ、ということはもはやないと実感したと言っている。ドイツ人にもすぐれた技量の持ち主、たとえばリトバルスキーのような選手もいれば、ブラジルにもドウンガのように組織プレーできる選手もいるということだ。両方のバランスが取れてはじめて強力なチームができるのだと彼は考えるわけだ。私もまったくその通りだと思う。そこで、彼はブラジルのことわざを披露する。

「ギターは1本の弦だけでは弾けない。」

「個人技はその選手の能力を表現はするが、個人技だけで試合に勝つことはできない。それはブラジルでもドイツでも変わることはない。」

2003年9月17日の日韓壮行試合

いやー、昨夜（2003年9月17日）の日韓戦はひどい試合だった。オリンピック日本代表チームはまったく良いところがなかった。この試合を見た人は、私が「アウエーの意味」で書いたことがまったく事実であると言うことが良く分かったことだろう。

前半スターティングメンバーは、大久保、森崎、松井、阿部、山瀬などJリーグの鹿島アントラーズなど有力チームで活躍している鳴り物入りの若手主体だった。ところが、阿部の2回のマークミスで2失点してしまったわけだ。

一方、後半に出てきた選手はJリーグの比較的下位チームや昇格し立ての無名チームの所属している若手である。後半に得点した高松はほとんど無名の選手だった。

ダウンガの定義「アウエーで活躍する選手が良い選手である」に従えば、この高松は実に素晴らしい選手だということになる。なぜなら、ほんの1回の出場チャンスをも物にした選手だからだ。一方、常連レギュラーの大久保、山瀬、森崎、松井、阿部などはそれほどの選手ではないということになるわけだ。これは一考に値するだろう。

しかし、ここにダウンガの言う日本人監督特有のくせが問題になるわけだ。つまり、日本人監督は選手のグラウンド以外におけるイメージで抜てきし、基本プレーの練習をないがしろにするという傾向である。

この試合を見た限りでは、山本監督もこの鉄を踏んでいた。実は、私はこの監督はあま

り好きではない。それはこの監督が生真面目過ぎて、プレーが予測つくものしか行わないからだ。ダウンガの言うマリーシア（ずる賢さ）が皆無だからだ。つまり、彼はかっこいいプレーする選手が有望若手だと錯覚しているわけだ。

事実、レギュラー組の松井の得意業はヒールパスだという。また、ディフェンダー阿部やミッドフィールダー森崎の得意業は超ロングシュートだという。おまけにフォワード大久保の得意業はドリブルシュートと来た。つまり、これらの選手の離れ業はダウンガの言葉で言えば、せいぜい2、3%の実現可能性しかないプレーだということになる。これに固執するかぎりチャンスはない。したがって、せいぜいシュートチャンスが2、3回しか訪れないアウエーの国際試合ではまったくの無力になるわけだ。

昨夜の試合では、松井は事ある度にヒールパスをして敵にカットされてチャンスをつぶし、大久保はボールを持ち過ぎて失敗。阿部に至ってはデフェンダーなのにシュートに気をとられて自分が相手のシューターのディフェンスすることを忘れてしまっていたというわけだ。これでは試合に勝てるはずがない。ましてやミッドフィールダーの森崎双児兄弟は、前線へパスするよりかっこ良くバックパスばかりする。これじゃ、シュートできない。おい、どっちへ攻めているんだい？バックパス、2、3本続けたら、最前線から自分のキーパーまでボールが戻ってしまうよ。

一方、後半に出てきて得点した高松は基本的に忠実で、マークのはずし方、ヘディングの

ポジショニングすべてに基本通りだった。だから、ドウंगाが言うように、試合の90%は基本プレーが出て来る。それゆえきっちり得点できたわけだ。

まあ、そういうわけで、この監督の下では最終予選は突破するのは相当に厳しい気がするにはする。もっとも、ちまたでは強豪韓国に「2」で善戦したってほら吹くやつもいるかも知れないが、ドウंगाに教えを乞うたほうが良いと私は思う。

第五章

ブラジル代表

セレソン、その響きは私を魅了した

さらに続けよう。

ここで「セレソン」という言葉がブラジル人にもたらす意味を語っている。「セレソン」とは、サッカーのブラジル代表のことだ。これはブラジルには際立って特別の意味を持つと言う。つまり、ブラジルで男の子として生まれたすべての者が一度は夢見る目標だからだ。ドウंगाは言う。

「まさにいま、自分の夢が現実のものになろうとしている。このチャンスを逃すことはできない。そんなことはできるはずがない。」

「ブラジル代表は職業ではない。我々はお金を稼ぐためにワールドカップに出場するわけではない。自分の欲求を満足させるために出場するのだ。」

最後に、彼はペレの時代からのセレソンを知っていて、過去のセレソンを応援していた頃から自分がその試合に出ているかのようにイメージしていたと言う。

「夢に見ていた、というのとは少し違うと思う。私の幻想はもっと大きく広がっており、まるで自分がその試合に出ているかのように感情移入していた。試合前の選手は何を考えているのだろうか、スタジアムはどんな雰囲気なのだろうか、ブラジル代表にはどんな問題があるのだろうか、そして激しい試合のなかで11人のヒーローは何を感じ、何に反応しているのだろうか。そんなことを想像していた。」

「私はパウロ・アルカンをはじめ、偉大な選手たちの長所を学びたいと願っていた。答えのひとつはすぐに得ることができた。彼らが偉大になれたのは、すばらしいテクニクがあつただけではない。彼らも選手である前にひとりの人間だ。人間としての準備ができていたのだ、ということだ。」

チャンスは一度しかない

ここでダウンガは、自分自身がイタリアワールドカップのブラジル代表選手に選ばれた頃をふりかえる。選手とつて一番大切なことは、レギュラーポジションに辿りつくことではなく、それを維持することだ、と言う。そして、何よりもそのチャンスはたった一度しかないと説明する。これは多くの日本人がいただいているイメージとは逆なので一考に値すると私は思う。

2日前の日韓戦を見れば分かつただろうが、サッカーを良く知らない人は、だれしも日本代表に選ばれるのは何度かのチャンスがあるだろうと考える。もちろん、当事者の選手たちも同じだ。自分が一度代表に選ばれたからには例え失敗してももう一度や二度チャンスが来るだろうと考える。また解説者もまたチャンスはあるから頑張れと言うだろう。しかし、ダウンガはそれは違う、まったくの間違いだと述べているのだ。

「チャンスは5回も6回もあると思っっている人もいるかも知れない。一度くらいチャン

入を逃しても、また次があるさと思う人もいる。だがそういう人は、そう思っている限り、結局何もつかむことはできないだろう。」

事実、せっかく代表の座を掴んだのに、そこで実力を発揮できなければ二度と使ってもらえない。なぜなら候補者は他にもたくさんいるからだ。また、選手は1年また1年と年を取る。したがって今活躍せねば、翌年には自分よりもっと若い有望な選手がそれを奪うことになるからだ。人生においてはチャンスは一度なのだと心して細心の準備をせよとドゥンガは言っているのだ。ブラジルには次のことわざがあると言う。

「1日1匹のライオンを殺さなくてはならない。」
この意味は、

「私にとつて代表チームでのトレーニングは、一回一回が命がけで、少しの時間の無駄にできない特別なものだ。ブラジル代表でプレーするのは私の夢であり、人生でもっとも執着していることであり、そのためにあらゆる仕事をこなしてきた。それがもうすぐ現実になるといふところまできて、チャンスを逃すことなどできるはずもない。」

「多くの選手は代表に選ばれた時点で気を抜いてしまい、準備を怠り、チャンスが現れてもそれを逃してしまつが、私はこのチャンスを絶対に逃すわけにはいかなかったのだ。」

例の日韓戦の解説をしていた前園、武田もそうやって代表を去った選手だった。代表に

選ばれるまでの予選では必死に活躍したが、代表に選ばれるとすぐに気を抜き、油断して、本番ではいつも精彩を欠き、結局代表から去っていった選手だった。こんな連中を解説者に雇ってどうする気なんだろうね。ドウンはほとんどがこういう選手だと言っているわけだ。

今回の大久保、松井、阿部、山瀬、森下兄弟も明らかに気を抜いて油断し準備を怠ったように見える。さて、彼らに次回のチャンスは来るだろうか？まあ、日本人が監督だから、何度もチャンスがあるだろう。だから、逆に日本は強くないわけだ。中田でも実力を発揮しないなら代表から落とす。それが選手のためになるのだとドウンは言っているということなんだよ。つまり、いつも危機感を持つてことに当たれということだ。

これはドウンがも言っているように、何もサッカーに限った話ではないだろう。科学者の場合も同じことだ。ポストドクのチャンスは一度しかないと考えるべきだろう。私はそう思う。助手や助教授や教授のチャンスは一度しかない。だからこそ必死にそのための準備を行っておかねばなるまい。しかし、日本ではこれまで一度雇われたら公務員制度のおかげでそれ以後もずっと雇われた。だから、危機感が失われ、研究者や教育者の仕事がおろそかにされたとも言えるわけだね。

ラザローニと呼ばれて

ここで、ドウンガは1987年のジーコのだよなら試合で初めてレギュラーに選ばれ、それ以降ずっと代表の座を守り続けたことを述べている。そして、イタリアワールドカップの話。スウェーデン²⁻¹、コスタリカ¹⁻⁰、スコットランド¹⁻⁰で予選リーグ突破。そしてマラドーナのアルゼンチンに最良の試合をして負けた。

90年の代表には何かが欠けていた

ここでドウンガはイタリアワールドカップのブラジル代表がどうして負けたのか自分なりに考察している。ブラジルのチャンスは15回、一方アルゼンチンのチャンスはたったの1回。それをものにされて負けた。そして一言で言う。

「ブラジルはワールドカップで優勝するだけの準備ができていなかったのだ。」

つまり、世界最強の状態でワールドカップ出場し、選手もまわりも自信過剰になり過ぎていた。そして本戦ではこれが裏目に出たのだとドウンガは言う。

「タレント（才能）」というのは勝つために必要な要素のひとつではあるが、しかしすべてではない。どれだけ多くの人が、勝てる能力がありながら勝者になれなかったことか。やはりそこには何かが欠けていたのだ。タレントは家にたとえばシャンドリアのようなものだ。それぞれの家の個性を表し、見ていて楽しい。だが土台ができていなければ家は

バランスを崩し、シャンデリアごと壊れてしまう。」

「90年のブラジルには少しずつ何か足りなかった。オーガナイズ、計画性、バランス感覚、調和、団結心、精神的余裕、執念、継続性。特にワールドカップで優勝するためには長期間にわたる準備が必要になる。それはただ代表チームのトレーニングを長期間行うというだけでなく、精神的準備をも含んでいる。」

そして70年代のペレの時代のサッカーを振り返り、やはりそこには十分な準備があったことを認めている。

このことをダウンガは第一章でフランス・ワールドカップ日本代表チームにアドバイスしたのだが、現実には岡田監督率いる日本代表はダウンガの忠告すべてを無視して結局3連敗で予選敗退したというわけだ。あのときこのダウンガの忠告をもっと真剣に聞いていればというのは後の祭り。すべてはチャンスは一度きりしかないのだ。もう二度と岡田監督が代表監督に戻ることはないだろう。

執拗な批判、中傷がもたらしたもの

ここで、世界最強の鳴り物入りでイタリアワールドカップに乗り込んだブラジル代表チームが負けて、凄まじい罵声や非難や中傷がもたらさせられたことを語っている。敗戦のすべての責任は主将のダウンガ1人のせいにされた。優勝の期待が大きかっただけにその反

動も大きかった。この批判、中傷は4年間続き、たいへんつらい時期だったと彼は述べている。そこで彼が学んだことは、

「人生には調子の良いときも悪いときもあるが、大切なのは調子の良いときに他人を軽蔑しないことだ。そんなことをしたら、今度は自分がうまくいかなかったとき、誰も手を差しのべてはくれなくなる。うまくいっているときほど謙虚にならなくてはならない。勝ったときも負けたときも同じ人間でなくてはならない。もっとも、負けることを知るのは簡単だ。なぜなら結局は皆、負けを経験することになるからだ。やはり難しいのは勝つことにちがいない。」

第一章で、イランに勝ってワールドカップ初出場に沸く日本国民に向って、もっと謙虚になれとダウンガが言った意味はこういうことだったのだ。つまり、敗者のイランチームの身にもなれということだ。勝者がいれば同時に必ず敗者もいる。その敗者の前では謙虚に振る舞うべきだ、ということだ。確かに負けたイラン選手を慰めた日本選手は誰一人いなかったね。ましてや日本のマスコミはもっとひどかった。そして岡田監督の人気はうなぎ上り。いつの間にか初出場であることは忘れ去られ、簡単に予選突破できると胸算用する者も出た。岡田監督は1勝1敗1分の勝ち点4で予選突破すると豪語する始末だった。

こんな状況を見かねてその8年前にイタリアの敗戦のつらさを知っていたダウンガだからこそ、日本人にアドバイスしたんだね。もっと謙虚になって自分の現実を知れ、そして

もつと準備せよつてね。しかしそれを怠つた日本は、結果は3連敗の予選敗退。この時の代表選手のほとんどは次回に呼ばれることはなかった。またマスコミはドウンガが言ったように180度態度を豹変して日本代表を非難中傷したわけだ。まったくドウンガの言つた通りのことが起こつたわけだ。

優勝か、さもなければ死を

ここで、ドウンガはそれほどまでに自分に対する非難があつたにも関わらず、パレイラ監督の下で、もう一度のチャンスがめぐつてきた。しかし、その意味は

「また我々は、これが最後のチャンスであるということも知つていた。もし今回また破れたら、もし優勝できなかつたら、今度こそもう誰も絶対にブラジル代表に戻れないと思つていた。そればかりか、マスコミはアメリカ大会が近づくにつれ、もし優勝できなければ代表選手はブラジルに帰ることは許されないだろう、などと言つようになっていた。」
だつたわけだ。つまり、ブラジルのマスコミや国民はブラジル代表に

「優勝か、さもなければ死を」

と最後通牒を下したということだ。そしてなんとか最終試合で南米予選を突破した。

これと日本代表を比べてみてどれほど日本人が甘いか良く分かると言つものだろう。日本代表キャプテンの中田が得たプレッシャーとブラジル代表キャプテンのドウンガが得た

プレッシャーはものの比ではない。しかし、その中でダウンガはやり遂げたのだからすごい。そしてフランスの前のアメリカでそれをすでにダウンガは実現していたのだ。そして今度フランスに出る中田率いる日本代表に自分の経験を基にしっかりと忠告していたというわけだ。ダウンガがどれほど素晴らしい人物が分かるだろう。

問題を先送りしてはならない

ここでダウンガはワールドカップ本戦までの間に行ったブラジル代表の準備について語っている。フィジカル・トレーニングのこと。メンタル・トレーニングのこと。コミュニケーションのこと。そして何よりもキャプテンの行わなくてはならないこと。彼は主将として、さりげなく選手にアドバイスする方法がもっとも効果的であると述べている。ミーティングや会議でみんなの前で槍玉にあげるのではなく、食事の後、トレーニングの後、レクリエーションの後などでさりげなく近付き、冗談とともに言うべきことは言い、聞くべきことは聞き、誠実にことにあたること、そして何よりも問題はその都度解決していくべきものであることを述べている。

果してこれを中田が行ったか？私にはどうも中田はこれを怠ったように思う。これが「チームへの献身」という意味なんだね。サッカーで勝利するためには、自分だけが目立れば良いというものではない。それでは自分は確かにステップアップできるかもしれない

が、チームは負けてしまう。サッカー後進国の日本ではそれは許されてもサッカー先進国のブラジルではそれが許されないのだ、とドウंगाは言っているわけだ。

つまり、日本の会社で行っているような「コンセンサス作り」の方法がチームには必要であるとドウंगाは言っているのだ。一人一人の選手自らが勝利への執念を燃やすようにならない限り、勝利は来ないと彼は考えているというわけだ。もちろん、この部分は当時問題児と言われたロマーリオのこと、そしてロマーリオとベベトの確執などのことを言っているのだろう。こういう問題は先送りせず、その都度話し合って解決すべきだとドウंगाは言うのだ。

グループの代表として成し得たこと

そして、彼はこのチームの勝利への結束力を高める最高の手段を手に入れた。それは、チームの用務係であろうが、トレーナーであろうが、チームのすべてに関わる人に同じ金額の報奨金を手に行き、確認をもらったのだった。だれであれ誠実に自分の意見を述べよとドウंगाが言うのはこういうレベルの意味なんだね。お偉方であれ、年長者であれ、納得のいかないことは誠実に意見を述べる。そして誠実に話し合ってより良い結果を出す。これがチームの主将の勤めだと彼は言う。

はたして日本代表でこれを行ったものがいたか？中田はこれをやったか？井原はどうか？中山はこれをやったか？おそらくだれもこんな発想は思い浮かばなかっただろう。

とにかく、ドウंगाのこの行為によってあれほどいざこざが耐えず予選突破すら難しかったブラジル代表は、一致団結した。それは単に選手だけの団結ではなく、スタッフ全員の団結だったのだ。

我々は手をつなぐことで団結をアピールした

このために、ドウंगाはみんなと話し合っている作戦に出た。それは自分達の団結、結束力が固いことをブラジル国民に示すために、試合出場の際にみんなで手を握りあって出場するというものだ。今でこそこれはブラジル代表の伝統のように見ている人も多いが、実はそうではない。

これはアメリカワールドカップ予選で四苦八苦していたドウंगा率いるブラジル代表が、ドウंगाが言うようにその問題をすべて解決してそれを示すために初めて行われたものだ。その予選でアウエーで負けていたボリビアにホームでどうしても勝たねば予選突破の可能性がなくなるというもつとも大事な試合で、ブラジル国民に意気込みと団結を象徴するために行ったのだとドウंगाは述べている。それ以後、これがセレソンの伝統になった。

そしてこの試合から連勝を続け、最終戦で勝ってやっとのことで南米予選を突破し、ア

メリカ大会本戦出場を果たしたというわけだ。そして予選リーグをも突破し、次第に調子が上がリ、全員がチャンピオンになれることを確信するようになったと言う。

7月4日、あらゆる困難を乗り越えた日

ここで日本人にはあまり知られていないが、決勝トーナメントのアメリカ戦の困難を語っている。アメリカ人であれ、フランス人であれ、日本人であれ、自国ホーム開催ではいろんなことを行ってくる。大観衆で威圧する。大統領観戦や王様の観戦で威圧する。アメリカはダウンガ率いるブラジル代表になんと独立記念日をぶつけてきた。この日はアメリカでは建国記念日であり、戦いに勝つ象徴的意味がある。そして休日であり、スタジアムはアメリカ人でいっぱいになった。当然アメリカチームの覇気は上がり、この日に偉大なことを行つてやろうと闘志満々だったわけだ。

そして試合が始まった。もっとも厳しい試合になるというダウンガの予想通り、ブラジルは観衆の敵にされ、むなしく負けて敗退するようにプレッシャーがかけられ続けた。そしてさらにレオナルドのひじ打ち一発退場が起こった。焦り、時間は過ぎ、試合は劣勢を余儀無くされた。しかし、そこでもダウンガは動じなかった。選手にはまず落ち着くように叫び、10人の場合にはポジションニングが大事で役割分担に努めた。攻めながらもスペースを開けず、ボールキープし、とにかくゴールされないように努めた。そして後半30分

ついにベベトのゴール。最大の危機を回避した。

最後にブラジル代表監督がどのポジションにも2人づつ連れていくという伝統を述べている。つまり、だれが出場できなくなっても必ず代わりがいるという方法だ。つまり、レオナルドが出場停止になっても必ず同じポジションの代わりがいる。ブラジルは選手層があついで、いつも同じくらいのレベルの選手がいる。

だがしかし、と彼は言う。そこで良い結果を出さなくてはたった1回のチャンスを逃しただけで、補欠のチャンスすら失ってしまうと彼は指摘している。だから、自分がリザーブの選手だからといって準備を怠ってはならないのだと言う。いつでも試合に出られるように準備しておかなくてはならない。94年のアメリカ大会の選手たちはこのことを実に良く知っていて選手交替があつてもうまく行ったというわけだ。

翻つて日本代表を見ると、同じポジションをたくさん連れていったり、まったくブラジルのようになかった。ましてや、リザーブをまったく出場させなかったわけだ。岡田監督はこのダウンガの本が出ていたにもかかわらず、リザーブは3人しか使わず、最終戦で小野もやっと出ただけに終った。このことからブラジルと日本ではリザーブに対する考え方もまったく違っていることがわかるだろうね。

私はこのアメリカ大会の全試合をビデオに残している。だからもちろんこの試合も見た。ララス率いるアメリカは本当に強い良いチームだった。この大事な試合でレッドカードを

もらったレオナルドはこの退場が基で非難されつづけ、ほとぼりがさめるまで、結局は日本でプレーする他なかったほどだ。だから彼は鹿島アントラーズに来たのだ。それほどに厳しい試合だった。おそらくこのアメリカチームは史上最強のアメリカチームだったろうと私は思う。

激戦の合間にはリラックスを心がけた

ダウンガはここで、アメリカの次ぎのオランダ戦、そして準決勝のスウェーデン戦を振り返る。そして、こういつ試合と試合の合間の過ごし方を説明する。とにかく身体を休め、精神的にもリラックスすることだ。人それぞれそのリラックス法は異なるが、各人の方法でリラックスせよと言う。

そして試合前には、グラウンドに入る直前の更衣室で短い話をする。それはみんなを奮い立たせ、100%の力でグラウンドに入っていけるような話だと言う。

「やるべきことはすべてやった。準備は整った。あとはグラウンドでプレーするだけだ。」
そしてブラジルは、オランダに3-0、スウェーデンに1-0で決勝戦に向った。

誰もロベルト・バツジオを責めることはできない

最後のイタリアとの決勝戦の前ダウンガはみんなにこう言った。

「我々はこのときのために努力をしてきたのだ。我々はいま、自分達の手の中にチャンスを握っている。だから絶対にこのチャンスを逃してはいけない。あと1試合でチャンピオンだ。」

この試合はみなさんも良く知っているあのシーンで終わった。つまり、延長でも決着がつかず、PK戦となり、4人目のドウンガが入れた後、最後に5人目のロベルト・バツジオが蹴ってポストの上にはずし、バツジオがうなだれるというシーンだ。

ドウンガはこの最後の自分のPKを振り返った。

「ペナルティーエリアに着いてボールを置くまで、私はどんなボールを蹴るべきか考え抜いていた。強く蹴るのか、弱く蹴るのか。もしミスをするとしたら、それはどんなボールを蹴ったときか。結論は思い切り蹴ってはいけないというものだった。思い切り蹴ればゴールキーパーの正面にいつてしまう。ゴールの隅を狙って、ボールのスイートスポットを少しはずして回転させる、いわゆる”乾いた”蹴り方をしなければならぬ。」

「視界にあるのはゴールキーパーだけで、他には何も見えない。ただいつもよりゴールが小さく、ゴールキーパーは大きく見えた。」

これはよく耳にすることだ。闘将ドウンガにしてもこれほどまでに緊張していたわけだ。

王監督が現役時代によく言っていたように、調子が良いときにはボールが大きく良く見える。調子が悪ければボールが小さく見える。サッカーでも同じだ。調子がよいとき、集中

できているときにはゴールは大きく見えるが、プレッシャーがあればゴールは小さく見え
キーパーがやたらと大きく見える。

「私の蹴ったボールがゴールに入った瞬間、頭上にある建物の重さを感じ、初めて疲労
感に襲われた。自分とゴールキーパーだけの世界に、ラジオのスイッチが入ったように騒
音が流れ込んできた。」

ドウंगाはこれほどまでにキックに集中していたんだね。そして、気がつくと、バツジ
オがゴールをはずして、ブラジルが4度目の優勝をとげた。長い沈黙の後の優勝だっ
た。しかし、ドウंगाは言う。

「誰も彼を、そしてこのときペナルティーキックをはずした他の選手を責めることはで
きないだろう。まともに考えれば、あの状態でペナルティーキックを蹴るだけのバランス
を保つのはとても困難なことなのだ。」

こうやって勝者は謙虚になり敗者にも気を配れとドウंगाは言っているわけだ。日本代
表がイランに勝ってワールドカップ出場を決めたとき、ドウंगाが日本に言っていたのは
このことだったんだね。日本流で言えば、

「勝ってカブトの緒を締める。」

ドウंगाはブラジルで若い頃日系ブラジル人の老人と話すことが好きだったと言っ
ている。彼らが話す日本の昔の侍魂をいつも感心して聞いていたと彼は語る。こうしてみる

とドウンガには古代日本の侍魂がまったく日本から遠く離れたブラジルにも伝わっているということが良く分かる。だからこそ、ブラジルではグレイシー柔術なんていうのも出て来るわけさ。そのドウンガが今の日本の若者を見て、かつての日本人の優れた特質はどこへ消えたって大変残念がっているわけだ。2日前（2003年9月17日）の日韓戦でも日本の若者にはこの侍魂はまったく失われていたわけだ。

名声を手にしても私は私であり続ける

最後に、ドウンガはこうやって優勝の後にもたらされたものについて振り返る。人気と名声のためにどこへ行っても人だから。しかし名声を手に入れたが、自分は何も変わっていないし、それで変わるわけでもないと言う。つまり、自分は自分だというわけだね。

「また、自分が勝ったから前回のワールドカップ敗退の時に自分を非難した人たちに言い返したり、悪い扱いをすることもしない。そんなことをしたら、彼らが私にしてきたことと同じことをすることになってしまう。それは私自信の考えに反することだ。」

「第一、人生でもっとも楽しいときに、わざわざネガティブなものを見方をするのではないだろう。私が考えなくてはならないのは、私を信じて、サポートしてくれた人々のことだ。」

そして、ブラジルで1週間の休みを取るとまたドイツへ次シーズンのために戻ったとい

うわけなのだ。いやー、さすがにドウンはプロ中のプロだね。

ワールドカップ・アメリカ大会決勝ブラジルーイタリア戦、そしてその後

昨夜（2003年9月19日）、久しぶりに1994年ワールドカップ・アメリカ大会の決勝戦ブラジル対イタリア戦を見直してみたんだが、まったくドウンの言っていた通りだったので、たいへん感動した。

真夏の40にも達するグラウンドの上で、懸命に戦うイタリアとブラジル。本当に素晴らしい試合だった。ドウンがこの本「セレソン」で指摘していたように、ドウンはやたらと走り回るのではなく、ポジショニングに気を配り、敵の攻撃をすばやく察知して止め、味方がボールキープできるように的確なパスを出していた。そして幾度となく決定的チャンスを作ったが、ロマーリオのシュートミスで得点には至らなかった。

同様にイタリアも闘将バレージを中心に固い守りのカテナチオで切り抜け、前線のマツサーロ、バツジオに繋ぎ、幾度となく決定期を演出した。しかしこちらも怪我のバツジオにはゴールを決める程の力はずに残っていなかった。後半もすぎ延長戦の最後には走る度に痙攣を起こすバツジオと初戦で骨折し手術してたったの1ヶ月のリハビリでこの決勝戦に復帰してきたバレージの足にも痙攣が来た。そして0-0で最後のPK戦。

ワールドカップ史上初のPK戦が始まった。控えの選手たちはコートの外で祈り、声援

を飛ばす。みんなで肩を組み声をかけるのはブラジル。それぞれが一生懸命に声援するイタリア。キッカーたちがセンターサークルに集まった。まずイタリアが先行し、バレージが最初にキックした。しかし、もはやボールコントロールする力のないバレージは思いきり蹴ってボールがバーの上に飛ぶ。ひざを折り天を見上げて残念がるバレージ。両者1人ずつはずして2-2で来て、イタリア4人目がマツサーロ。しかし身体はコチコチだ。キーパーのタファレルの飛んだ方向に蹴って阻止された。

そして、ブラジル4人目がダウンガ。彼が書いていたように、ボールへゆっくり進み、ゆっくりボールをセット。しかし、なかなかボールを置かない。彼が言ったように、その間どんなボールを蹴るのかずっと考えていたのだろう。そして助走を長めに取り、右隅に矢のようなインサイドキック。ゴーリール。右手を曲げてガッツポーズのダウンガ。自信に満ちた目でメンバーと抱き合う。こうしてイタリアにプレッシャーを与える。これがマリーシアだ。最後のキックはバツジオ。もはやコントロールの効かないバツジオは思い切り蹴る道を選んだ。ボールはまったくバレージと同じようにバーの上を超えた。うなだれるバツジオ。試合終了。

控えの選手達が一目散に駆け寄り抱き合うブラジル。ダウンガ、ジーニョ、ジョルジーニョはひざを折って抱き合い神に感謝する。みんなが大喜びで歡喜の雄叫びをあげる。そして飛び跳ね、手をたたくブラジル代表。その傍らで泣きじゃくるイタリア代表。イタリ

アキーパーのパリユーカはグラウンドに突っ伏して一人泣きじゃくる。しゃがみこみうなだれて動けないバツジオ。座ったまま人目もはからず泣き叫ぶバレージ。呆然とする他の選手たち。はた目にはそう見えた。しかし、この短いPVS戦の間にもダウンガが語ったように、選手達の心の中ではそれぞれに思考し決断し実行したわけだ。そして勝利の女神はブラジルに微笑んだ。

ダウンガは言う。

「勝利するものには負けたものにはない何かがある。」

これをダウンガは「セレソン」で伝えたかったのだ。私はそう思う。このイタリアも強かった。しかし、確かに何かが欠けていたのかも知れない。ダウンガの言うように、怪我の克服、体力トレーニング、こうしたものがイタリアには欠けていたのだろう。完全な状態でPVS戦まで戦えなかった。イタリアは満身創痍の状態だった。ダウンガの言葉を日本人はいわゆる

「勝てば官軍」

の気持ちから出た言葉と見るかも知れない。この意味は、まぐれでも勝てば勝った方は何とでも言え何でもできるということだ。

しかし、この同じ状況に対しても勝って得意満面になり自惚れその勝利の意味を振り返らない国民とダウンガのように勝っても自惚れずその意味を問い直そうとする国民とでは

大きな差が出るのではないか。私はそう思う。

私は気付いた。ドウングをコート外から見つめ祈る控え選手たちのその中にまだ18歳のロナウドや20歳前半のカファーがいたことを。そして、この4年後のフランス大会でドウングとともに準優勝。8年後の日韓ワールドカップで史上初のブラジルドイツ戦でロナウドのシュートで優勝した。こうしてドウングの精神は今もブラジル代表セレソンたちに引き継がれている。

第六章 ニッポン

来日の動機と新たな目標

さらに続けよう。

ここでダウンガは3年間のドイツ、シュツットガルトでのプレーの後、自分がどうして来日しJリーグに参加したのかその理由を語っている。つまり、ジュビロ磐田に入団したのかを語っている。当時ジーコなどブラジル人JリーガーたちからJリーグのことを聞いて良く知っていた。しかし、その頃はまださすがに日本でサッカーすることは、現役引退した選手や2流3流のプロ選手がプレーする場所のように見なされていたこと。しかし、同時に、これまでの自分のサッカー人生で得た哲学のようなものを残すというまったく別の道もあり得るという一種の野心が芽生えたのだと彼は言う。

また、ブラジルで子供の頃から日系ブラジル人の老人達の話聞くのが好きで、日本人に対しては大きな関心があったこと。初めて日本に来たのが1984年キリンカップの時にインテルナショナル代表としてプレーしたこと。その時皇居や大相撲など各所を訪れて日本文化に非常に興味が出たこと。日本食も好きだったこと。そして何よりも

「日本の力は、人間の内部から人生の本質がにじみ出て来るような力だと思っていた。たとえ個としては弱くても、集団になると発揮される力だと思っていた。昔、世界は日本の愛国心や侍の精神を競ってコピーしたものだ。そしてそこには生活スタイルを守り、小さなことも大切にする人々が住んでいると思っていた。」

と考えていたことが大きかったと述べている。

だがしかし、いざ現実に日本に来てみると、

「だがどうやらその力は、今日もふつつとわき上がっているようなものではなく、過去の遺産によるものだったようだ。実際に日本に来て生活してみると、私が抱いていたイメージは次々に撃ち破られ、その度にショックを受けたものだ。」

「また私は、本で知った侍の知性の高さや集中力に憧れていた。それが今や毎日のように日本人に向って「集中しろ」と、叫んでいる始末だ。」

もちろん、これはジュビロ磐田の選手達のことだね。ゴン中山、名波、服部、福西、鈴木、田中に代表される日本人選手たちのことだ。この中でもっとも影響を受けたのは、ドウंगाと同じミッドフィールダーのポジションにいる名波と福西と服部だろう。特にボランチと福西と服部は四六時中怒鳴られていた。しかし、そうしてドウंगाの精神が少しずつ身につき、Jリーグの代表的チームに育っていったのだ。このことをドウंगाは念頭において語っているのだ。

磐田の街が私を迎えてくれた

ここでドウंगाは、日本のサッカー選手と世界のワールドカップレベルのサッカー選手のメンタリティーの違いを語る。ドウंगाは、これまで自分がブラジルやイタリアやドイ

ツという世界のサッカー超先進国の中で、「勝利か、さもなければ死を」というプレッシャーの中で、まるで日本の戦国時代の侍やあるいは宮本武蔵のように生きてきたと言う。それに対してジュビロ磐田というほとんど無名の市民サッカーからでてきたサッカー選手達の間で、感覚のずれが初めは非常に大きかったと白状する。

「たとえばそれまでの私は、勝利か、さもなければ死かという図式が当たり前になっていた。ヨーロッパでプレーしてきた。負ければ批判の嵐が待っている世界だ。ところがここ日本では、勝っても負けても何かが変わるということはない。敗者が五分もすれば元の顔に戻っている。それを受け入れるのは、私にとって非常に辛いことだった。もちろんチームメイトも私のメンタリティーを受け入れるのは辛かっただろう。」

この危機にドウングにアドバイスをしてくれたのが、かのハンスオフト監督だったと言う。そう、ドーハの悲劇の時の日本代表監督だ。三浦かず、井原、ラモス、武田、福田、中山などの時の監督だ。そして少しずつ日本人と打ち解けるようになったと言う。

「もちろんチームの目的は規模の大小で変わるわけではない。これまで各国の大きなクラブで経験してきたことを、このクラブの清澄のためにすべて伝えていかねばならない。それが私の決意だった。」

いやー、実に素晴らしい人物だね。ジーコがやはり鹿島アントラーズで果たした役割、ドイツの優勝メンバーのリトバルスキーがジェフ市原に果たした役割とまったくいっしょだね。

これが世界のトップサッカー選手の心意気というものだろうね。

最近、これと同じようなことをかのフランスのジダン、チリのチラベルト、イングランドのベツカムなども言っているんだね。将来ベツカムもこの日本にやって来るかも知れないよ。

ちなみに、かつてもう1人の天才サッカープレイヤーが同じようなことを言っていたんだよ。それがあのマラドーナだった。マラドーナが世界のマラドーナになったのは、神戸で開かれた世界ユースだった。当時15歳でマラドーナは日本でデビューしたのだ。だから、30台になると彼も日本でプレーすることを望んでいたんだ。しかし、彼が麻薬使用の疑いがあったとかなんとか外務省がクレームをつけて結局マラドーナは今に至って一度も日本の地を踏むことはできなかったというわけだ。その代わりにマラドーナの弟が来た。それが元福岡でプレーしていたマラドーナだ。

なぜ年長者に遠慮するのか

ここでドウンガは日本人カルチャーにショックを受けたことを白状する。それは年長者や有名選手に若者が本気で挑戦してこないということだ。練習であれ、練習後であれ、日常会話であれ、年長者に日本の若者は距離を置く。これは世界ではまったく考えられないことだとドウンガは言う。

「私がミスをする、何もなかったかのように黙り込んでしまう。誰かが注意しなければならぬようなミスでも、そうはしない。彼らが私のミスをオープンに話題にするまでにはしばらく時間がかかった。」

「目上の人や会社の上司には、注意しないものだという習慣が、日本社会のどこにでもあるのだと私が知るのにも時間がかかった。その習慣がスポーツの世界にも悪影響を与えているだけのことなのだが、ただサッカーに関して言えば、これは考えものだ。」

これは非常に重要なことで、科学者社会でもまったく同じことが行われている。もちろん教育機関でもそうだ。日本の学生は教授が犯した間違いを訂正しない。先生が間違ったことを言っても正さない。こうしたことは良く知られているが、これが日本だけの文化だ、ということにはあまり日本人は気付いていない。これをダウンガが指摘しているのだ。実際、お隣の韓国でも中国でもこの習慣はない。

間違つて欲しくないのは、日本の学生や若者が文句や意見を感じないということではない。日本の学生や若手も陰口はたたく。ダウンガ言っているのは、文句や指摘は言うべきときに（例えば練習中や試合中に）言わねばならないのであって、すべてが終つてから陰口をたたいたり、愚痴つたりすることは違つのだということなんだね。掲示板などで自分の先生の陰口を言つたり誹謗中傷するということを行っているのではなく、その都度必要なときに誠実に直接自分の文句や意見を述べなさいってということなんだよ。私もまった

くダウンガの言っていることが正しいと思う。

このことが第一章でダウンガが述べたことだ。

第一は、日本人は他人にストレートに話をすることをためらう。

第二は、文句は言うべきときに言わねばならない。

第三は、だれに対しても率直に誠実に意見せよ。

また、グラウンドの上やトレーニング中には怒鳴り、文句を言い、叱咤激励するダウンガが、いざ練習場の外ではまったくそれを忘れて二重人格にでもなったかのようにまったく別人になることに対して、ダウンガは次のようにも言っている。

「また私がグラウンドの中にいるときと、外にいるときでは別の人格の持ち主だということを理解してもらつものにも時間がかかった。グラウンドの中では初日から叫び、怒鳴り、叱っていた。ところがトレーニングが終ると急に冗談を言ったりふざけたりする。本当はいつたいどういふ人間なんだ、というわけだ。」

まあ、これが西洋で言う、いわゆる「公私の区別」というものなんだが、どうも日本人にはこれが二重人格的に見えてしまうことなんだね。この意味の公私の区別ができる日本人はほとんどいない。首相はどこにいても背広を着て首相ずらす。大学教授は道を歩いていても大学教授ずらししている。日本人のサラリーマンは勤務時間外でもサラリーマンだ。これが欧米人や外国人には「公私混同」と映っていることが日本人にはおよそ理

解されていない。ドウナはこういうことを言っているわけだ。

日本の選手は考えるスピードをあげるべきだ

ここでドウナは日本サッカーについても忠告する。この忠告が実にもっともらしく、また面白い。

「Jリーグの試合を見てまず思ったのは、日本人はボールといっしょにいるのが大好きだということだ。つまり、全体のなかでポジションニングがそっちのけになっているということだ。」

これは、日本ではいわゆる「田舎サッカー」という言葉がある。これは、小学生のサッカーのように、ボールの行くところ行くところに人が群がるようなサッカーのことを言う。だれもがボールに触りたくて自分の役割そっちのけでボールに触りに行く。実はこれと同じ習性が日本のトップレベルにもあるということをドウナは言っている。たとえば、中村俊介は、得点したくてボールのあるところ右でも左でもどこでも出向く。普通は左利きは左サイドに張り付いているものだ。そして自分が空けたスペースに敵が入り逆にピンチになって点を入れられる。

このミスで中村は日韓ワールドカップの代表選考からもれたのだ。中村もそうだ。自分は中央でプレーすべきポジションにいても牛若丸のように右へ左へとボールのあるところ

に動き回る。そしてときどき自分のいるべきところにいない。今回のオリンピック日韓壮行戦でも阿部は自分の守りをさぼった。そして2得点されてしまった。こういうことをドウンは言っている。

第二は、

「日本の選手には、ミスしたあとにプレーのスピードが上がる傾向があることもわかった。本来はミスしたらいったんプレーのスピードを下げ、味方のパスが成功するなどしてチーム全体の信用が回復してから、再びプレーのスピードをあげるべきだろう。」

これは実は日本人には何を言っているのか非常に理解しにくいことだろう。実にドウンは鋭いところを見ていると私は思う。この傾向は、世界の中田のプレーにもよく見られる。たとえば、中田がキープしていたボールをマークしていたレオナルドがボールを簡単に奪ったとしよう。中田はしゃにむになってそのボールを取りかえそうとする。

これは高部氏の「日本をフランスに連れていった男」の中で実際に中田が言ったことだ。あるいは、何かのミスをした日本人選手はそのミスを取りかえそうとして必死になる。この日本では当たり前前のプレーをドウンはそれは間違いだというのだ。中田は言った。

「おれのボールを簡単に奪ったレオナルドに腹がたった。」

つまり、頭に来たわけだ。つまり、ドウンが発見した日本人の特徴は、すぐに頭に血

が登るといふ日本人の習性がサッカーのプレーにも出ていくことなんだね。実に鋭い観察だ。私はそう思う。問題は、そのあとに何が来るのかということだ。つまり、自分の本来の役割を忘れておろそかにするということだ。自分がミスしてカッとなり、本来の役割やポジションを忘れてボールに向っていってしまふ、ということが日本選手の特徴だとドウンガはここで言っているわけだよ。

第三の指摘はもつと面白い。

「いまでもひとつ分らないことがあるのだが、なぜ日本の選手は負けている時でも試合中に水を飲むのだろう。暑い日には仕方ないし、勝っているときには好きにするのは良いが、涼しい季節のナイトゲームですら途中で水を飲んでいく。試合中に水を飲んでも胃にたまるだけで身体に吸収されるには時間がかかる。水分は試合の2、3時間までに十分補給しておくべきで、試合中の補給には気分転換くらいの効果しかない。選手には誤った情報が行き渡っている。」

これは今やJリーグはおろか小学生にまでまん延している事実だ。私がサッカーをやっていた頃は、水はハーフタイムと試合後に飲む。練習でも休憩時に飲むだけで、プレー中には飲むことが許されなかった。それでもわれわれは何も問題なくプレーできたものだ。それが、今や四六時中コートサイドに寄って来てはペットボトルに手を伸ばす。ましてや自分のチームが負けていても水を飲む。

これはどうしてかとダウンガは言っているのだ。かつてメキシコのワールドカップの時にはあまりの暑さのために試合中に選手に氷を渡すということがあった。それでも水はなかった。マラソンでも水シャワーをしたりして身体を冷やすことは暑いときには必要だ。しかし、マラソンの選手でも寒い時や勝負時には水には手をつけないで勝負に集中することとは良く知られている。

ところが、日本の選手は勝敗の状況や天候に関係なく水を飲む。これがどうしてなのかダウンガには理解できないのだと言う。私もこれは不思議に思う。彼に言わせれば、負けている試合中に水を飲むということは、敵前逃亡、つまり試合放棄に等しいということだろう。どうやら飲料水メーカーのプロパガンダのために日本サッカー界は利用されたんじゃないかと私は思う。なぜなら試合中に配られるスポーツ飲料はメーカーやスポンサーからただで提供される。選手が試合そっちのけでうまそうに飲むのはメーカーには嬉しいことに違いない。

そしてダウンガは言う。

「栄養学や医学、心理学など、サッカーは科学的な情報と深く関わっている。食事の重要性はだいぶ認識されるようになった。試合では多くの消耗やショックに見舞われる。したがって身体のコンディションは常に準備されていなければならない。食事や休養が大切なのはこのためだ。また科学的トレーニング理論はフィジカルコンディションや能力を、

効率的に高めてくれる。誤ったトレーニングは無駄な消耗になりかねない。こうした情報は、もっと日本にも行き渡っていいものだ。」

事実、最近行われた国際試合でナイジェリアの有名選手がグラウンド上で死んだ。これほどまでにプロサッカーは苛酷なスポーツであるということ、ドウングは戒めているわけだよ。

向上心がなければ生きていく意味もない

ここでもドウングは日本人の特徴を指摘する。まず最初に、日本人の底の浅い一面を指摘する。それは、

「グラウンドの外でスター選手が生まれてしまう現象もそのひとつだ。」
と言う。これはJリーグ初期、三浦カズやラモスなどグラウンド外のはでな私生活で有名になり、それが日本代表の象徴のようになったことや、最近でも中田や川口などルックスやブランド志向のグラウンド外のこと、話題になり過ぎ、それがサッカーのプレーにまで悪影響を与えているということ、を言っているのだ。

実際、日本での圧倒的人気で調子に乗ってイングランドに渡った川口選手の失敗が思い起こせる。十分な準備もなく最強リーグに行って活躍できなかった彼の失望は大きい。

次に、

「チームによってかなり格差がはじめていることが分かった。あるチームはどのようなプレーしたらいいか教え、また間違いを直すこともできるプロフェッショナルな指導者を連れて来て成功したが、あるチームでは真のプロフェッショナルがいなかったために、日本人選手の成長が見られなかった。」と指摘する。

これは、前者の代表は鹿島アントラーズのジーコのこと、後者の代表は東京ヴェルディのことだろう。ヴェルディは三浦、ラモス時代にはJリーグチャンピンになったが、それ以後はちょう落の一途を辿って現在に至っている。

一方、鹿島アントラーズはジーコやネルシーニョの教えを守り今やいつも優勝候補にあげられるチームに変ぼうしている。実はこのアントラーズにジーコが最初に来たとき、ここでダウンガが言っていることと同じショックを受けたのだ。

たとえば、ディフェンダーの大野は毎日カップラーメンを食べていたり、試合後にビールで乾杯していた。一般に現役のサッカー選手はシーズンに入ると酒は御法度。一滴たりとも飲まないのが約束である。すべてがこういう調子だったようだ。そしてジーコが入ってプロサッカー魂と常識を教え込んだわけさ。つまり普段の私生活からのプロサッカー選手の間範が必要だったわけだ。しかし残念なことにヴェルディにはそういう選手がいなかった。

第三に、

「日本人の選手達にこの、自分で判断するという習慣が身につくまでにはまだ時間がかかるだろう。」

「言い、この習慣が日本の若者はおるか、日本人全体にとって素晴らしい財産になるだろうとドウングは言う。つまり、サッカーは日本人にとって年長者から受け身な姿勢で物事を行う文化から、いつも自分の頭で考え判断する人間を育てるという目的に非常に良いスポーツだろうと考えるわけだよ。私もまったくそう思う。そして、最後にドウングは言う。」

「私は日本でも人生の意味は同じだと信じている。たとえばひとつの会社に入り、毎日仕事し、家に帰り、同じことをだけを繰り返し、喜びや満足がなく、そして55歳になつたらリタイアするような人生は、生きているのではなく、死を待っているようなものだと思う。仕事の種類は何であれ、その仕事のなかから何かを学ぼうとし、仕事に誇りを持ち、もっと活動的に、もっと楽しく仕事をすれば、それは人生を生きていることになる。自分から何も学ぼうとしない人の人生は、ロボットのようであり、第一楽しくないだろう。」

これは、かつてかの黒沢明映画監督が、「生きる」で言いたかったこととまったく同じことなんだよ。やはりドウングも世界のクロサワとまったく同じことを言っているわけさ。日本がこれまでそれでやって来れたのはそれが必要がなかったからだろうが、今後はそう

はいくまいとダウンは予想している。

責任とはチーム全員が共有すべきものだ

ここで日本選手の悪い特徴を付け加える。

「日本選手はミスを恐れてプレーをし、そのことが原因となってミスを犯してしまうことが多い。トライしてミスをするならまだいいが、それ以前にミスをしでかしてしまう。もっと自信を持ったほうがいい。」

これは、私がずっと言ってきたこと、つまり、日本人は、

「目先の小損にこだわり、人生の大損をこく。」

という特徴があると見事に符合しているだろう。この日本人一般にある社会風潮や習性が、実はサッカーなどあらゆるスポーツにも出ているということだ。ミスしまい、ミスしまい、と暗示を自分にかけて、逆に本当にもっと重大なミスを犯す。こういうタイプの選手が日本には実に多いのだと彼は言っているのだ。トライにミスはつきもの。しかしトライもしないミスは最悪だということだね。

しかし、これを身につけるのはそう簡単ではないと言う。

「それはそう簡単なものではない。身体的な準備をすること、しっかりした計画と考え方を持つこと、テクニックを磨くこと、そしていつかは彼を超えてやると思い続けること。」

これらがなければ、自信など持とうと思っても持てるものではない。」
そしてダウンガは言う。

「プロフェッショナルというのは、どういう状況でも自分の仕事を遂行する人のことだ
と思うのだ。」

そして、プロフェッショナリズムと人間関係や友情とは別物だと説明する。

「日本ではひとりひとりがそれぞれの責任を追求し合うということはない。」

サッカーでは自分はこの仕事するが、あなたは別のやり方で仕事するということはない。
チームがうまく行くには、全員が同じレベルの責任で仕事に向わなくてはならないはずだ
と彼は言うのだ。しかし、中村俊介に代表されるように、自分はこういうプレーをしたい、
私はこういうプレーがしたいと勝手気ままにやっているのが日本サッカーだとダウンガは
見抜いているというわけなんだよ。

生き残りをかけた戦いがいま始まる

ここでダウンガはまだ出来て間もないジュビロ磐田の施設があまりに素晴らしすぎると
いうことを指摘する。つまり、プロに入り立ての若手も有名選手も同じような待遇で迎え
ることに対して、それは考えものだと苦言する。若い選手にはむしろ逆境を与え、それを
バネに這い上がって来るべきもので、若い内から物を与え過ぎると、それが当然となり、

逆にその環境から抜け出せなくなるということをこれまでの自分の若いときの経験を基に指摘している。つまり、日本のシステムはあまりに過保護すぎると警告しているわけだよ。ここは非常に一考に値する部分だよ。私はそう思う。

たぶん、日本で引き籠りの若者が非常に多くなって来ているのもここに問題があるのかも知れないよ。そもそも貧乏な国の子供のように個室、子供部屋を与えなければ、そもそも引き籠る場所などない。あまりに過保護な社会で育った子供は自分の部屋に閉じこもる。

「一般に日本の若い選手のことを幼く感じてしまうのは、彼らが独立する時期のせいもあるのだろう。」

真面目すぎるのも考えものだ

ここでドウंगाは、コミュニケーションの大事さと、これまでのブラジル、イタリア、ドイツ経験で得た各国の国民性の違いを説明する。

「イタリア人とブラジル人は似ているところがあり、心が顔の表面に出て、感情を爆発させやすく、感激屋だ。他人を信用しやすいかどうかは別にしても、シンプルで分かりやすい。ドイツ人はたとえば監督の指示に従うに際して、うまくいくまでやり続ける。決められた時間の最後の1分まで固執する。日本人は信頼関係を築くまでは時間がかかるが、ある一步を飛び越えると全面的な信頼を寄せる。5時間でも6時間でも練習することに何

の疑いも感じず、黙々と言われたことをやり続ける。」

「日本人はいつも誰かがリーダーシップを発揮するのを期待する。ひとりひとりがインシアティブを発揮する、というような考え方をしない。」

これは、一度中田がキャプテンだと言い出すと、中田の出来不出来に関わらず彼にリーダーシップを求めるのと同じことだろう。こういう気質は日本人独特だとダウンガは言っている。

この後半は

「真面目すぎては良くない。生真面目すぎるのは問題だ。」

ということのために、ダウンガやブラジル人が良くやるいたずらやジョークの話が語られている。しかし、私の父方の亡くなった祖母が良く言っていたことだが、

「固い本ばかり読んでいては頭が固くなる。たまには柔らかい本を読め。」

と80を超えたおばーさんが女性セブンとか読んで渡してくれたものだ。だから、日本人でも昔の時代には今のような頭の固い、血の巡りの悪さを困ったことだと考える習慣はここ日本にもあったのだと私は信じているのだ。

試合中、私は何を叫んでいるか

ここではダウンガはジュビロ磐田に来てプレーしている最中に実際にどんなことを叫ん

でいるかということが述べられている。最初はあまり日本語が分からず、

「気をつけて！」

「大丈夫！」

「ファウルするな！」

「落ち着いて！」

「待て！」

「前！」

「後ろ！」

「右！」

「左！」

なんていう言葉を発していたようだ。これに「お手！」なんて加えれば、なんとなく自分の犬に命令しているような感じだが、実際サッカーではこれで十分だね。

しかし自国語のポルトガル語では、

「なぜそんな場所にいるんだ！」

「なぜマークを忘れてしまうんだ！」

「なぜそんなミスをするんだ！」

というようなことらしいよ。

この話の中でサッカーでは実に重要な話があった。日本人選手がよくボールに気を取られてマークを外してしまうときに

「ボールは勝手にゴールに入らない。相手の選手が蹴って入るのだから、その選手をマークしろ！」

いやー、まったくその通りだ。これをこの前の日韓戦で市原の阿部は忘れてしまった。また、フォワードの選手にも言いたいことが山とあったそうだよ。日本選手は一般にゴール前のファーポストにつめたがる。しかし、センタリングの80%はニアポストに来る。そんな時ドウंगाは、

「そつちじゃない！」

と叫んでももう遅い。

これはゴン中山や高原のことだね。もちろん柳沢も大久保もみんなファーポストに走る。これを逃げるとサッカーでは言う。日韓ワールドカップのトルコ戦でもそう。西沢はことごとくファーポストへ逃げた。ニアポストの混戦を恐れるからだ。この間の日韓戦で点を入れた高松ですらどちらかと言えば、たしかにファーポストで待っていた。強いて言えば、高原はニアポストに行くが、これこそドウंगाの教えに従っているというわけなのだ。

日本の教育はマリーシアを許さない

最後に、「マリーシア」について語る。これは「ずる賢さ」のこと、言い換えれば、インテリジェンスのことだ。相手の裏をかく、意表をつく、相手をつかかさせる、こういうようなプレーのことだ。ドウंगाはよくこういうことをすると言う。

「たとえば、試合終盤で2-0で勝っていたとしよう。もしそんなときにファウルのタックルを足に受けたら、私は痛そうなふりをして、芝生に寝たままなか起き上がらないだろう。主審が来ても、『すみません、ちょっと待って』などと言いながら、できるだけゆっくり立ち上がる。まずはストッキングを何回か上げたり下げたりする。右足が終わった次は左足だ。スパイクのヒモを結び直し、ボールを慎重にセットし、10歩も20歩も助走をとってからようやくフリーキックを蹴る。ただ、そのフリーキックは1日しかはなれていない選手にちょこんと出すだけにする。」

勝っているときはこうやって時間かせぎする。リードされているチームはだんだんいらだってきて、神経質になり、ますます反則を犯す。これが典型的なマリーシアのあるプレーだとドウंगाは言う。そう言えば、ブラジルの選手は見ていて憎たらしくなる程こういうプレーをする。イランでもイラクでもそうだ。これが日本選手には足りないということだ。私もまったくそう思う。いつも単調に同じペースで同じようなプレーをする。これが日本

チームの特徴だ。これでは勝てないとダウンガは言うわけだ。

「サッカーはゲームだ。ゲームは自分が有利になるように進めるのが鉄則だ。だが、このマリーシアが日本に根付くまでにはまだ相当な時間がかかりそうだ。」

「なぜ日本人にマリーシアが足りないのか。それは文化と教育のせいであり、間違ったことをすることに對する極度の恐怖心のせいだろう。」

「ボールがタッチラインを出てしまったとき、日本人は自分からプレーを止めてしまいが、審判は笛を吹くまではプレーを続けるのが当然だ。ラインを出たかどうかの判断は審判が下すべきもので、選手が下すべきではない。また日本人はファウルを犯したとき、よく手を挙げて自己申告することがある。だがこれも審判が笛を吹かなければプレーを続行すべきだろう。ファウルかどうかの判断を下すのは審判だけだからだ。こうした日本人のプレーは美德とは言えない。ただ単にマリーシアが欠けているだけなのである。」

「いやー、実に良いことをダウンガは言うね。昨夜見た1994年のアメリカ・ワールドカップ・イタリア戦の決勝戦でも、ダウンガはふんだんにマリーシアを見せていたんだ。これを読んでから見てみると実に面白い。まったくその通りだった。有名な例では、世界のレアルマドリードの左サイドバックのロベルト・カルロス。彼に触ったもんには、まるで激突したかのように吹っ飛ぶと言われているのだ。もちろん、アルゼンチンのオルテガもマラドーナもそうだ。触っても吹っ飛ぶかどうかは相手の都合次第さ。そうやってイニ

シアタイプを取り、試合を支配していく。これがマリーシアだとダウンガは言っているのだ。しかし、高部氏の本にもあるように、中田も大袈裟なふつとびは嫌っているという有り様だ。

「真面目すぎるのも考えものだ。」
とはよく言ったものだ。

マリーシアの欠除

土曜日（2003年9月20日）のJリーグの実際の試合を見ると、ますますダウンガの言った通りで、日本人にはマリーシアが欠除していることが分かる。

前後半の終了間際の失点がかんりの割合を占めているからである。実際、
磐田―鹿島：前半42分に磐田が追い付く。

仙台―東京：後半終了直前で東京追い付く。

市原―柏：後半ロスタイムで柏追い付く。

大阪―神戸：終了間際に神戸が追い付く。

これらを新聞（たとえば徳島新聞）では

磐田4試合勝ち星なし、鹿島と分ける。

仙台また勝てず

市原逃げ切り失敗

終了間際に神戸が同点

などと書いているわけだ。

しかし、ダウンガの観点からすれば、鹿島、仙台、市原、大阪の選手にはまったくマリーシアのかけらもない、ということになるだろう。優勝候補の鹿島や磐田でもそうだと
いうことだ。同じ同点になる試合でも、終了間際に同点にされるといいう試合が100%

というのはあまりに異常な事態と言えると私は思う。

ドウンガのいうように、残り時間が少ないときには、不必要に攻めてボールが相手に渡らないように努力する。なぜなら相手チームは必死で追い付こうと捨て身でトタイしてくるからだ。そのためには、マリーシアを存分に發揮して時間を経過させなくてはならないはずだ。実は日本選手にはこれがないということだ。

強豪ブラジルやアルゼンチンやドイツやイタリアと対戦して、仮に1点でも2点でも先にリードされたとしても。そうなるとまず逆転は不可能だ。なぜなら存分にマリーシアを發揮して時間切れまで徹底してボールキープするからだ。憎たらしいくらいにずるがしくボールを回す。だからこういう強豪国と対戦して勝つためには先取点を取り、焦らせるしかない。もちろんこの場合にもマリーシアが必要だ。先の日韓ワールドカップで韓国やトルコが善戦したのも、強豪国相手にいつも先手を打っていったからだ。

また、アルゼンチンや南米のチームがやる典型的な作戦は、弱いチームと対戦する際、前半で先に3点取ってしまう、あとはマリーシアで時間をつぶすというものだ。弱小国はこれでも勝てないとあきらめてしまい、試合を捨てる。これも立派なマリーシアだ。

いやー、ドウンガが言うように、日本人にマリーシアが身につくまでには相当な時間が必要なようである。

第七章 Jリーグ

トレーニングは試合を想定して行うものだ

さらに続けよう。

ここでダウンガはJリーグに入って、つまりジュビロ磐田に入ってみて、日本選手や日本の監督のサッカー練習には重大な間違いがあるということを語っている。私は、ここでダウンガが言っていることはサッカー選手になろうという若者には非常に大切なことなので、ぜひ一読するように、そしてこれを全部実行するようにしたほうが良いと思う。

オフト監督に代わってブラジルからフェリペ監督に代わったが、これが実に良かったとダウンガは述べている。それは、それまでのいわゆる日本的な練習から非常にブラジルの実践的練習に代わったからだと言う。これには、たとえば、ポジション別の練習。間違いを正す練習などがあると言う。

【ポジション別の練習】

センターバックの練習：ヘディング、パスのインターセプト、激しいマーク、ファウルにならないタックル。

ミッドフィールダーの練習：長短のパスとマーク、プレーのリズムを作ること。

シューターの練習：シュート練習。

【間違いを正す練習】

これは、次のようなものだと言う。

センタリングのときの身体のバランスはこれでいいのか。

シュートの時にはボールを足のどこに当てたらいいのか。

フェリペ監督はこれを執拗に選手に要求した。しかし、日本の監督は一般に選手に対して自主練習に任せ、注意するにも不安そうに話し、はっきり言い渡すことを恐れているかのような、とドウंगाは言う。これは、先日のオリンピック代表の日韓壮行試合の山本日本代表監督にもまったく言えることだろう。彼は、いつも不安そうにコーチする。これではダメだとドウंगाは言っているのだ。

「たとえばトレーニングのときに、選手がゴロのセンタリングばかり蹴っていたとする。試合になればそれらは多くの場合、センターバックの選手にカットされてしまう。そうであればトレーニングのときからセンターバックの存在を意識し、センターバックを超えるようなセンタリングをあげなければならない。それを申し渡すのは監督の仕事だ。」

私に言わせれば、こういうのは選手の想像力の問題。これができない選手と言うのはあまりに頭が悪いということだろう。お引き取り願ったほうが良いのかも知れないね。

執拗に繰り返すことで選手は成長する

さらに続けよう。

ここでダウンガは日本人監督の持つ一般的傾向を議論している。日本でプレーしているブラジル選手達からよく聞く話としていろんな重要な話題を述べている。それらをまとめる以下のようなものだろう。

【日本人監督が不安そうに見える。】

これは、経験がないからだろう。これでは個性集団の選手達をまとめられない。監督は選手に自由に自分の考えを話す自由を与えなくてはならないが、決定を下すのは監督である。その態度は力強く、堅固でなければならぬ。さもなければ選手からの信頼は得られない。これは従順な性格の選手ばかりの日本人だけで通じることで、他国ではこうはいかない。

【監督は選手がいやがる練習をさせるものだ。】

監督は、選手の足りない部分を強化するためにわざわざ選手のいやがることをさせなくてはならない。また、対戦相手を観察し、分析し、警戒すべき点と弱点を洗い出し、次の試合に対応するトレーニングを組まねばならない。つまり、監督には経験が大きくものを

いう職業だが、日本人監督にはそれが不足している。

【指導者は何が正しく何が間違っているかをはっきりさせ、選手に伝えなくてはならない。】
これは黒板の前で行うこともグラウンドで実際に教える場合もあるが、日本選手には後者が適している。

「ジユビロのあるサイドバックの選手に、センタリングについて2年間あれこれと教えていたが、全く理解されなかった。ところがたまたまいっしょに日本代表の試合を見ていたとき、相馬のプレーを例に出しながらセンタリングの際の身体の位置やボールの位置を説明したら、以外にあっさり理解してくれたものだ。」

「プレーは実践に近い形で見せたほうが分かりやすい。それも何回も何回も、嫌になるぐらい見せたほうがいい。私にすべての選手をつききりで教える時間があればいいが、そういうわけにもいかない。だからこうしたことを選手に徹底して教え込む人が必要だったのだ。」

「日本の選手は2回か3回やってみて成功すると、もう満足して練習をしなくなるところがある。指導者も同じで、選手に2回か3回やらせてみてうまくいくと、もうこの選手はその技術をマスターしたと思ってしまいう面がある。だからこそ執拗に教え込む監督が必要なのだ。」

「私が何か説明していると、選手達が『はい、はい、はい』とあまりにも簡単にうなずくのでよく喧嘩になることがある。分からなかったら3回でも4回でも10回でも『分からない』と言い、分かるまで説明を要求するというのが私の言い分だ。分かったような顔をしていて試合で分かっていなかったら、これほど腹立たしいことはない。」
いやー、ダウンガは実にもっともなことを言う。私も全くその通りだと思う。

練習はプレーを完成させるためにある

ここでダウンガは日本人には間違っ理解されている練習法について説明している。

【トレーニングの時間はサッカー以外のことは忘れるべきだ】

トレーニングが終わればエアコンのきいた部屋に戻るのだから、少なくとも1時間半や2時間の間は、サッカーに集中すべきだ。日本で行われているトレーニングのいくつかはブラジルではレクリエーションと呼ばれている。トレーニングの後の30分、1時間と残って自主練習すべきだ。こんなことを言っている。

ここでブラジルで言うレクリエーションとは、ヘディングでボールつきをしたり、いわゆるミニゲームのことを言っているらしい。こういうのをブラジルでは練習の合間のレクリエーションとして行うが、日本ではこれがトレーニングと見なされてしまっているとい

うことだ。

つまり、私が良く言う「日本人の常識は世界の非常識」、「本末転倒症候群」というものに、日本サッカー選手や監督も知らずの内に犯されてしまっているということのようだね。

【指導者は選手にもっとプレッシャーをかけるべきだ】

「もしセンタリングの練習をやっていて、10本のうち6本か7本しかうまくいかなかったら、私は怒り狂う。練習中に繰り返し注意したミスをさらに試合で見せたら、私の怒りはほとんど収まらないレベルに達する。だがこの国ではミスしても何しても何も言われないう。指導者は選手に対してもっとプレッシャーをかけ、執拗に修正を迫らなくてはならない。」

【実践的なトレーニングを続けるべきだ】

日本選手は体力面、精神面を向上させねばならない。テクニクと戦術をもっと高度にしなくてはならない。実践的なトレーニングとは、そのためのトレーニングなのだ。

【シンプルなプレーを教えるべきだ】

「スーパースターのビデオを見ると、偉大な選手が実にシンプルにプレーしていることが分かる。だがそのなかで、たまたま込み入った技を使っているのを見ると、日本の選手はそればかり真似したがる。指導者さえもそんなプレーを教えたがる。だがもつとも難しいのはシンプルにプレーすることだ。」

「フエリペがやって来て、センタリングされたボールをディフェンダーが大きくクリアする練習が始まった。皆、いまさらなぜこんな簡単な練習をさせるんだという顔をしていた。だが試合になると、その簡単なはずのクリアが後ろに飛んでいってしまう。試合になれば緊張もあるし疲労もある。そのなかでトレーニングのときと同じプレーをするのは難しい。だからこそトレーニングでは試合のときに行われることを練習しなければならない。実践的なトレーニングとはそういうことを指す。」

「いやー、まったく私もそう思う。これは、ジュビロのディフェンダーの鈴木や田中のことだね。」

【利き足以外も練習すべきだ】

「毎日右手で文字を書いていた人が突然左手で書こうとしても、それは難しい。試合では90%を利き足である右足でプレーしたとしても、10%は左足で蹴ることが必要になる場面がある。ところがその人が右足ばかりでシュート練習していたらどうなるだろう。」

彼は左足で蹴ればゴールになるチャンスを失うことになる。Jリーグばかりでなく、どんなクラブの監督も、利き足でないほうの足のトレーニングをさせるべきなのだ。」

「いやー、ドウンはほんとに良いことを言うね。まったく私もそう思う。これは名波や服部や中村のことだろうね。連中左足しか練習しない。たしかにロベルト・カルロスも左利きだが、右でも普通の選手より遙かにすごいキックすることはあまり知られていないからねー。」

【しつこく反復して教えるべきだ】

「一見簡単に見えるクリア練習でも、選手はヘディングをきちんと額でしているか。真上にはしていないか。目をつぶっていないか。監督はそんな細かいところまで目をこらし、しつこく技術を教え込んでいかなければならない。」

「サッカーのトレーニングで大事なことは反復だ。反復によって、プレーは完成に近づいていく。単純に見えるパスの練習でも、できるだけ早くボールをコントロールし、できるだけ正確に返さなくてはならない。パス、ヘディング、シュート。これらのトレーニングに、もうこれで十分という限度はないのだ。」

「いやー、実に鋭い指摘だね。実はこの当たり前のことがJリーグではできていないとドウンは言っているわけだ。確かに高校生までにも似たような練習はしてきている。しか

し、それはあくまで高校生レベルのお話だ。スピードも違えば体力も筋力も違う。ボールコントロールも大人のスピードと正確さ、それもプロレベルのスピードと正確さが必要だ。基礎体力もトップレベルのものが必要だ。だから、大人になっても、プロになっても同じような練習を反復することが大事だとダウンガは言っているわけなのだ。そのためには、大人のレベルの集中力が必要だと言っているわけだ。

この点、日本の相撲や剣道や柔道の選手のほうがダウンガの言っていることの意味が良く理解できるのではないかと私は思う。相撲や柔道や剣道では1つの技を身につけるには3年かかると言われている。つまり、3年間毎日同じ技を反復して練習するというわけだ。毎日受け身、投げ技、寝技などを繰り返し練習する。身体の成長に合わせて負荷の度合いも変わる。そうやって大人の練習を行うわけだ。

ダウンガはサッカーもこれと基本的には同じだと言っているのだ。しかし、現実には、子供の頃や高校生の頃にやったような練習はつまらない練習で、プロではもっと芸術的な芸術的なプレーの練習があるものだ。日本のサッカー選手は思っているのではないかとダウンガは指摘しているわけだね。実際には、そうではなく、よりシンプルにより正確により強くより早く同じことができるようにトレーニングするのがプロの練習だと我々に教えてくれているわけなのだ。

すべての犠牲は優勝によって報われる

ここでドウンガはいかにして日本人選手に勝つことの重要性、特に優勝することが大事かを教え込んだかを述べている。実際、これは実に難しいことだと言っている。

ゴン中山のようにJリーグの選手はそのほとんどがいわゆるアマチュア出身の選手だった。だから、ゲームも試合の勝敗には無関係に適当にやって、試合後にビールを飲んでみんなでわいわい騒ぐ。こんな生活がサッカーマンの楽しみだと思っていたわけだ。今解説者をしている津波なんていうのも大酒飲みで有名だ。しかし、これは全くの間違いだとドウンガは言っているのだ。

プロにとつては勝負に勝つこと、そして優勝すること、これが真の目的でなくてはならない。そしてそのためにはサッカー生活も練習も私生活もそのためにオーガナイズすべきであるということだ。良い十分なトレーニングをし、私生活も無駄にエネルギーを浪費することなく、素晴らしいゲームをして勝つ。この決意の固さ、勝利への執念こそプロ魂だとドウンガは日本人選手に伝えようとしたのだ。

これは、ジーコは鹿島アントラーズで行ったことであり、ジェフ市原でリトバルスキーやオシム監督が今やっていることでもある。しかし、これは実に難しいとドウンガは言う。それでも、少しずつ伝わって、とうとうジュビロ磐田は優勝したというわけだ。

そして優勝すると、今度はその結果自分たちにどういうことがもたらされるのか理解し

た。テレビコマーシャルのオフアール、給料が倍増する、日本代表に選ばれる、子供達や市民から英雄扱いされる、こういうさまざま素晴らしいことが優勝の結果もたらされると初めて理解したわけだ。そうなると今度は次も優勝しようとするさらに励むようになるわけだ。今年の阪神タイガースもまったく同じことが言えるだろう。優勝が選手をさらに大きく育てるということだ。こういうことを知っている星野監督や野村監督やダウンガは優勝にこだわるわけなのだ。

優勝すればそれまでいかに苦労したいへんであったとしてもそれがすべて最後に報われる。そういうことをダウンガは言っているのだ。

チームという共同体のなかで子供は大人になる

ここでダウンガはJリーグの人気ちよう落の原因を日本人に求められたことを告白している。そしてその原因を考察している。Jリーグはいきなり誕生とともに高い人気を得てしまった。これが通常の順序と逆だったために一般的には人気下がっているが、実は逆にサッカースクールが増え、サッカー選手の人口が増えているという現象が起きている。その数は野球をはるかに凌いでいる。そこで大切なのは、新しいサッカーファン、新しい信者を増やすために、投資をすべきであるとダウンガは言う。そして何よりも

「サッカーは喜びであり、楽しみであり、生活共同体である。好むと好まざるとにかか

わらず、チームという小さなコミュニティを成す。子供たちはこのコミュニティのなかで、権利、義務、自由、そして敬意を持つて仕事することなど、人生に必要なほとんどすべてを学ぶことができる。そのコミュニティは大人の社会とそっくりだ。楽しいこともあれば困難もあるし、良いこともあれば悪いこともある。それは人生の準備となり、子供を大人にする。サッカーは人を早く成熟させるところがある。」

つまり、サッカーはプロになるならならに問わず子供を一人前の人間に成長させるのに非常に素晴らしいものであるということだ。これにはまったく私も同感だ。これに関しては私の自伝の中にある「私がスポーツから学んだもの」を読んでみて欲しい。基本的にはダウンガが言いたかったことと同じことを私も体験してきたということなのだ。これは別にサッカーに限らないと私は思う。しかしチームプレーを要求するサッカーは特にこの点が際立っているのかも知れないね。

日本に異文化の波が押し寄せる日も近い

ここで、ダウンガは非常に面白い考えを述べている。日本は今後ますます国際化するの
は確実だが、国際的になるにつれて日本人が国際人になる必要がある。そんな場合に、サッカーは非常に日本人の役にたつとダウンガは言う。

「日本の問題は、かつては日本だけの問題ですんでいた。だが経済に限らず、国際化は進む。良い面も悪い面もあるだろうが、日本にも海外の影響が押し寄せて来るのは確実だ。教育だって、短期間のうちに変わっていくだろう。私はそんなとき、サッカーは必ず役にたつと思う。」

「サッカーでも、それ以外のことでも、日本にはさまざまな日本独特のルールがある。だがそれを世界が受け入れることはない。つまりそれほど異質なものが、否応もなく、まもなく入って来るということだ。」

「日本はカルチャーショックを受けるだろう。もう少しで、選手が監督に疑問を持ち、不満を言うような時代がやってくる。そうはなってほしくないと思っても、それは自然の流れというものだ。」

過去は唯一、博物館の中で生きている

ここでダウンガは日本サッカーの人気について語っている。日本のプロサッカーはつい最近だが、その運営方法はすばらしいし、ファンもすばらしい。サッカー環境もすばらしい。しかし、サッカー人気はサッカーの良いプレーに依存している。マスコミは日本のサッカーの現実を見ないで過剰報道している。オリンピックでブラジルに勝つたくらいで現実以上に日本が強いかのようになり、それがそうでないかわかると今度は逆に人気をちょう

落させようとする。しかし、こうした中でもサッカー選手はしっかりと仕事をやり抜くことだとダウンガは言っている。

「サッカーも人生も、あまりに勝利に酔いしれている時間はない。ひとつ終れば、またすぐに次の事を考えなくてはならない。ブラジルには

『過去は唯一、博物館の中で生きている』
という格言がある。」

いやー、ダウンガは実に良いことを言うね。サッカー人気を上げるにはひとえに面白いサッカー、素晴らしいプレーを見せるようになることだと。そのためには多少の成功で浮かれずにいつも前を向いて努力しなくてはならない、そういうことを言いたいんだね。まったくその通りだと私は思う。

私は欠点を見過ごせない

最後にダウンガはダウンガがコンフェデレーションズ・カップのために試合にでれなかったにもかかわらず優勝したジュビロ磐田に対しても注文している。特に、サッカー選手としての成長、人間としての成長が大事だと言う。

「同じことはジュビロ磐田にも言える。優勝により、ようやく我々の仕事は認知された。また個人的にリーグのMVPも与えられた。私のしてきた仕事にとって、これ以上の榮譽

はない。このことは同時に、より重要な責任を与えられたことを意味する。いままで以上に仕事をしなければならぬことを意味する。」

「サッカーそのものがたいした意味を持っているわけではない。大切なのはスピリットだ。人間として決意をし、人間として形成されていくことが大切なのだ。」

さらにダウンガは海外からのたくさんのオフアーがあるがまだ日本のサッカーのためにできることがたくさんあると言う。しかし、問題は日本の選手がそれを学びたがっているかどうかだと疑問を感じている。

「だが私にはその前に知らなければならぬことがある。それは彼らに学ぶ意志があるのか、ということだ。日本のサッカー界に、よくなりたい、向上したいという意志があるかどうかの問題だ。」

「私は教えるのと同時に、多くの事を日本人から学んでいる。私には学びたいという、確固とした意志がある。」

「勝利は多くの欠点を隠してしまうものだ。しかし私には責任がある。私はそれに目をつぶることはできない。私は原因を探り、今度はどこを改善すべきかを考えなくてはならない。」

「勝者こそ、目を大きく見開かねばならない。そのことを知っているのも勝者だけなのだ。」

いやー、ドウンガの精神性の高さを垣間見させてくれる話だね。私が日本の科学界に關しているんなエッセイや本を書いているのも、実はこのドウンガの精神とまったく同じことなんだがね。同じ一人の科学者として日本の科学者社会の欠点に目をつぶるわけにはいかないからだ。

第八章
キャプテン

私はJリーグの代表でもある

いよいよ最後の章になった。さらに続けよう。

ここでドウンガは1998年フランス・ワールドカップの予選に3回目のブラジル代表として旅立ったことが述べられている。1997年4月にマイアミに経ち、メキシコと戦うためだ。また、現段階のザガロ監督のチームと前アメリカ大会のときの代表チームとの違いについて書かれている。

アメリカで優勝した1994年のブラジル代表チームは、チームメイトのすべてが家族のように仲が良く気心知れていた。レギュラーと補欠の役割分担も明確だった。それはその前の1990年のイタリアワールドカップの時のメンバーがほとんど残っていたからだ。しかし、1997年の代表はメンバーのほとんどが海外でプレーし、練習するのもたいへんで、ザガロもチーム形成に四苦八苦していた。

こんな状況下で、ドウンガ自身がJリーグに所属するのは代表入りからすれば不利な状況にあった。なぜなら当時は日本でプレーするのはサッカーのためというよりは引退目前の選手が金目当てに行くと考えられていたからだ。しかも日本から南米への旅行は非常に長旅ですます困難な状況を生む。だから、日本でサッカーをしているブラジル選手は代表からは敬遠されるのが常だった。しかし、ドウンガはあえて自分がブラジル代表入りしたことで、日本のJリーグはヨーロッパ並みの場所であると現役選手たちに立派に証明し

たことになる、とドウ unga は言う。

「だが私が代表に復帰することによって、そんなことはない。日本にもコンペティティブなサッカーがあり、選手がフィジカルコンディションを保つことも可能なのだとアピールすることは出来たと思う。」

いやー、ドウ unga の心意気が伝わってくる話だね。事実、この後に行われたフランス大会のブラジル代表には元横浜フリューゲルで活躍したサンパイヨ選手もドウ unga といっしょに代表入りした。開幕戦でこのサンパイヨ選手がいきなり初得点したのは覚えている人も多いだろうね。

日本はもっと欲を出さなくてはいけない

ここでドウ unga は自分が再度ブラジル代表に呼ばれたのは日本のおかげだと言っている。というのは、アトランタ・オリンピックで日本がブラジルに1勝をあげ、ブラジルは優勝できなかったことがリーダーの必要性を最確認させてくれたからだ。ドウ unga は言う。このブラジル戦は、左サイドバックの通木（みちき）からのダイレクトパスのセンターリングをブラジルディフェンダーとキーパーの接触で取りのがし、最後に伊東が決めて勝ったというあの有名な試合のことだ。

しかし、一方で、日本はこれから大きな問題に直面するだろうとドウ unga は当時マスク

ミに答えた。その意味は、

「というのも、日本人はブラジルに勝つことであらゆることを達成したかのように思っ
てしまったようだが、けっしてそうではないからだ。もし喜んでいただけであつたら、こ
れから当たるだろう強いチームに負けることになる、勝利に対して驕つてはいけない、と
言いたかつたのだ。結局、私の言いたかつたことは当たつてしまつた。日本は続くナイジェ
リア戦を落とし、決勝トーナメントに進むことはできなかった。」

ここでドウंगाは強豪に勝つたことで油断しもうすべては終つたかのような気になつて
は次に負ける。勝つて兜の緒を締め直せと言つているのだ。しかし、その結果はドウंगा
の心配通りに進み、結局決勝トーナメント進出を逃してしまつた。つまり、ドウंगाは何
ごとも私の言つた通りだろつて言つているわけだね。日本がブラジルに勝つたのは、徹底
的に守りに回つて敵の一瞬のミスを突いたからだ。だからこういう戦法以外にどの国にも
日本は勝ち目はないのだが、日本は自分たちが強い気になり油断しこれ以外の戦法に出て
敗退したと彼は見ていたわけだ。

そしてこれとまつたく同じことを日本代表がフランス・ワールドカップ出場に沸いた時
期にも言つていたというわけだね。

「私は何度でも警鐘を鳴らそう。残念ながらその状況は現在も変わつていない。日本人
はワールドカップへの出場が決まつたことで、すべてがうまくいつていゝと思つていゝる。

だがまだまだ日本チームは多くの欠点を直す必要がある。日本が良い仕事をしていないと言っているのではない。良い仕事を続けなければならない。もっと欲を出さなければならぬ、と言っているのだ。」

さて、ダウンガがこの本を書いたちょうどこの時期、あの中田のシュート、キーパーが弾く、そして岡野のシュートの有名なシーンで、フランス・ワールドカップでワールドカップ初出場を決めた。日本代表は、喜びに沸き、日本国中が大騒ぎになっていたときだ。

一方、ほぼ時を同じくしてダウンガ率いるブラジル代表も中田率いる日本代表と同じくフランス・ワールドカップ出場をきっちり決めていた。このダウンガは、実に現実的で、冷静だった。この日本人のお祭り騒ぎをちょうどアトランタ・オリンピック予選リーグで強豪ブラジルを破り大騒ぎになっていたことと似ていると見ていたということだ。ダウンガはこの両方を日本人特有の性格のなせる業、日本人の軽薄さの象徴と実に冷静に分析していたわけだ。そしてアトランタの時と同じようなことが起こらなければ良いが、と日本人に警鐘を鳴り響かせていたのだ。

じゃー、その結果はと言うと、ダウンガの予想の通りとなった。日本のマスコミは日本が出場中もっともランキングの低いにもかかわらず、予選突破を軽くできるという風潮を作り、岡田監督を調子にのせてあたかも1勝1敗1分で予選突破できるかのように誘導した。そして、初戦アルゼンチンもクロアチア戦も善戦したが、アルゼンチン、クロア

チアオー、ジャマイカー」と結局3連全敗して予選敗退したわけだね。

点数を見れば分かるように、結果的には実力的にはあと一步のところまでいっていただけだ。この後一步の意味をドウंगाは言っていたわけだ。まだやることがたくさんあるのだってね。自分の実力を過信して怠けるのではなく、もっともっとと修練、鍛練すべきところがあるはずだ、というドウंगाの冷静な指摘はまったく事実に基づいていたわけなのだ。ちなみにこの時のクロアチアは強く、結局準決勝でフランスに2-1で破れはしたが、3、4位決定戦でオランダを破って3位になった。

一方のブラジルはチーム形成の困難な中、少しずつチームを仕上げ、訓練し、結局ブラジルは予選リーグトップで決勝トーナメントに進み、準決勝で危なくもオランダとのPKS戦だったがそれも制した。最後にフランスと決勝戦を戦った。結局この試合はあまりに審判がフランスよりで負けたが、しっかりとドウंगाの言った通りの展開で幕を閉じたというわけだ。

そして、さらに4年後、昨年の日韓大会にまで続く。この大会ではもはやドウंगाはブラジル代表ではなかったが、日本は自国開催で出場が決まっていた。ブラジルもエースロナウドの怪我のために非常に厳しい南米予選を勝ち抜いた。しかし、きっちり和本戦出場した。日本の監督は岡田監督から今度はワールドカップ常連組の一人トルシエ監督になっていた。トルシエは本戦出場まで実に良い仕事をし、日本は2回目出場のワールドカップ

で、ベルギー、ロシア、チュニジア2勝1分でトップで決勝トーナメント出場を実現した。

一方、韓国も時同じくして死のリーグを戦い抜き、決勝トーナメント出場を実現した。

このとき、日本国内ではちょうど日本がアトランタ・オリンピックでブラジルに勝利したとき、そしてワールドカップ・フランス大会に出場が決まったときと全く同じ状況が起こったのだ。つまり、予選突破で今度は決勝トーナメントを勝ち抜き優勝まで行けるという風潮だ。ここでもまったく同じく、マスコミは日本チームを持ち上げ、トルシエ監督をベストフォー入り確実という風潮に持っていったわけなのだ。もしこのとき誰かがダウンガにインタビューしていたとしたら、ダウンガは6年前のアトランタ・オリンピック、4年前のフランス大会を思い出せと言っただろう。しかし結局日本はダウンガなら忠告しただろうふうにしてトルコに敗戦し、ベスト16に止まった。

ところが、韓国はイタリア、スペインと激戦に次ぐ激戦を突破し、準決勝でドイツには惜しくも負けたが、結局3、4位戦で4位となった。この時の監督がヒディング監督だ。しかし、このヒディング監督こそ、あのフランス大会でオランダを4位に導いた監督だったのだ。強豪ブラジルとPK戦にまで持っていた監督だ。だから、この監督の闘志が韓国選手に乗り移って韓国ベストフォー躍進が実現したわけだと私は思う。一つの歴史の影には必ずその理由、因果応報というものがある。ダウンガの言葉では、勝者には敗者になんて何かがある、ということになるだろう。

勝ったら勝ったで、勝って兜の緒を締めよ。勝つと思うな思えば負けよ。などと、油断大敵、負けるのは自分自身にあり、とまるで昔の日本の古武士や宮本武蔵のようなことを言う。宮本武蔵は言った。

「オレは強くなりたいんだ！」

しかし、それにはそのためのやり方があるのだぞってドウंगाは我々に教えてくれるわけだ。ちなみに、宮本武蔵がなぜ強かったかって？そりゃー、ドウंगाのブラジルサッカー同様に、マリーシア、つまりインテリジェンスがあったからさ。私はそう思う。このブラジル、日韓ワールドカップでもカーンの強豪ドイツに2-0で勝って優勝した。

フランスに向けての戦いが始まった

ここで、ドウंगाはセレソン、つまりブラジル代表について語っている。もちろん1998年フランス大会に向けてのセレソンだ。

このチームには1994年の優勝したアメリカ大会時にはいなかった選手や補欠だった選手が入ってきている。たとえば、カフィーもロナウドもアメリカの時は1補欠選手だった。ロベルト・カルロス、リバウドはまだいなかった。こういう新しいトップスターといっしょにやっていくときの心がけについてドウंगाは述べているのだ。

「キャリアや年齢がどうであれ、ブラジル代表の選手はそれぞれに有能であり、有名で

ある。私は選手全員に敬意を払っているし、選手によって接し方を変えるようなことはない。」

そして初めて入った選手やキャリアの長い選手を扱う際の注意点を述べる。

「初めて代表入りした選手に、初日からあれこれ指示をしたり、アドバイスしたら、彼が何かノルマや規則のようなものを要求していると思ってしまう。それよりは彼らの好きなようにさせ、試合のときになってなるべくサポートすることだ。大切なのは彼らのやる気を出させることであり、長年いつも一緒にプレーしてきたかのように感じさせることだ。」

「だが若い選手が溶け込むのをためらっているようなときには、あだ名をつけたり、冗談を言って笑わせたりしてリラックスさせていた。もちろん相談に乗ることもある。たとえば現在の代表の若い選手は、マスコミからこれまであまり厳しい批判を浴びたことがない。それはブラジル代表がアメリカワールドカップで優勝して以来、批判されることが少なくなっただけのこととも関係がある。だがそんな幸福な時代がそう長く続くわけがない。批判の矢面に立たされたとき、これが30歳の選手なら、すでにさまざまな苦労をしているし、冷静さを保つことができるだろう。しかし20歳の選手にはまだ批判に対する免疫がない。」

これは当時20代初期の選手ロナウドのことを言っていたのだろうね。ロナウドはアメリカ大会ではまだ18歳で補欠だった。だから負けて批判されたということではなく、フラ

ンスに乗り込んだ。しかしフランスの決勝までは順調だったが、決勝前夜に全身痙攣を起こし当日の決勝戦では良いところなくフランスに負けた。この後まさしくダウンガの予想通り、ロナウドは批判の矢面に立たされたわけだ。事実、この時期以降、意気消沈したロナウドは度重なる怪我に見舞われ、一時は引退の危機にまで行ったのだ。そんな場合のことうすらダウンガは若者にすでにアドバイスしていた。

「もし批判をされたら、それ以上の結果を出せばいい、そうしないとさらなる批判を加えられることになる、それは代表選手なら仕方ないことなんだ。」

そして、この次の日韓大会でロナウドは奮起した。アメリカやフランスの時のような無邪気な風ぼうは消え、何ごとにも鉄の意志を持って貫き通す男の顔に変わった。これは、私の「日韓ワールドカップ2002」（太陽書房）にも書いたことだが、ロナウドはコンディションは完全ではなかった。しかしここぞという時の決定力と集中力は最高だった。そして見事日韓大会で優勝したというわけさ。これもすでに代表の座を去ったダウンガの置き産物だったということだろうね。

控えの選手も重要な戦力だ

ここでブラジル代表の秘密、控え選手とレギュラー選手の関係について語っている。

だれでも選手である以上レギュラー選手になりたい。ましてやブラジルではみんな人気

選手たちが代表に選ばれている。みんなレギュラーになりたくて補欠にはなりたくない。だがしかし、とダウンガは言う。だれがレギュラーでだれが補欠かは監督が冷静に試合を分析して対戦相手との兼ね合いで決まるものだ。だから、今は補欠でも次にはレギュラーの場合もある。またその逆もある。どんな場合にも補欠選手もレギュラーとまったく変わらずみんなレギュラーのようなものだ。だから、プロである以上、いつでも戦えるように準備しなくてはならない、とダウンガは言う。また、この準備がブラジルにはいつでもできているのでブラジルは強いのだということだね。

ところが、日本選手を見れば、明らかに補欠のときとレギュラーのときと目の色が違う。補欠になったとたん、隣の選手と無駄口をたたくし、試合に集中しない。また中村や中田のように一度補欠になると監督は自分を分かってくれないと意固地にすらなる。これではだめだとダウンガは言っているのだ。試合は補欠を含めた全員で戦うものだよね。しかし、一方の日本人監督とて似たようなもの。岡田監督はフランスで3試合でたった3人しか補欠を使わなかった。1試合は3人まで交替可能にもかかわらずだ。日本人監督はレギュラーがピッチで死にでもしない限り交替はないかのように考えている。しかし、これもダウンガの言うように事実ではない。23人の選手と監督やコーチ、マネージャー他すべてがチームメンバーとなつて一体化して戦いに挑まねば勝利はないということだろうね。私もまったくダウンガの意見に賛成だね。

キャプテンは医者のようなもの

ここでダウンガはキャプテンの仕事とはどういうものか、日本ではめったにお目にかかれない重要なテーマを語っている。私はそう思う。

まず、キャプテンはグラウンドの上で選手を怒鳴ることが必要だと言っている。

「動きの悪い選手、個人プレーに走る選手がいれば、ただちに注意しに行く。言っただけなら彼のプライドと勇気を揺さぶるために怒鳴る。その選手が変わるように、やる気を引き出す何かしらの方法を試みる。良い悪いは別にして、それはキャプテンであればしなければならぬことなのだ。」

「怒鳴ると萎縮してしまう、性格の弱い選手はブラジルにもいる。だが試合の緊張状態、興奮状態のなかで。「ごめんなさい」などとは言っていないだろう。何かを変えるためにはやはり怒鳴らなければならない。20分も30分も離れている相手に優しい言葉をかけることなんてできない、吠えなければならぬ、というのが私の考えだ。」

しかし、一方で次のようにも言う。

「もちろんグラウンドの中で起きたこととして、それをグラウンドの外に持ち出さないことも重要だ。」

これは、日本のビジネス界で言われている、「会社内の出来事を職場以外に持ち出さな

い」というのとほぼ同じことだろう。こう言えば、普通の人にもサッカーの世界のことが分かるだろう。しかし、これとて日本人には難しいことだろうね。

実は、私はドウンガよりずっと年上なのだが、私が高校生時代、つまり甲府南高校時代、そしてその後の東京理科大学のサッカー部時代にまったく同じことを独自に考えてやっていたのだ。これは、私の自伝の「私がスポーツから学んだこと」に書いてあるよ。そのおかげで、私がいた当時の甲府南高サッカー部、理科大学サッカー部は非常に強くなったのだ。

だから、私はドウンガの言う意味の、試合では怒鳴ることも重要だというのは実によく分かるのだ。人間だけれがその場でプレッシャーをかけない限り絶対にうまくはならない。単にそういうことなんだよ。これは科学でもなんでもそうだと私は思う。

誠実さはキャプテンに不可欠な資質である

ここでドウンガは何よりもキャプテンに必要な資質、誠実さ、について語っている。

特にスター軍団であるブラジル代表にありがちなことについて述べている。しかし、これはすでに立派なプロサッカーに育ったJリーグでも同様に言えることだ。だから、日本人サッカー選手にも言えることだ。それゆえ、日本人にも非常に役立つ部分だと私は思う。

ブラジルでは代表の何人が組んでチームに謀反を起こすことがある。つまり、監督とい

さかいを起こして謀反を起こすのだ。こういう場合に、ドウンガはそいつらに次のようにチームのキャプテンとして言うと言う。

「『私はあなたのことをよく見ている。これ以上問題を起こさないように注意しないと、どういう結果になるか分かっているだろうな。』と、はっきり予告しなければならぬ。それでも謀反しようとしたら、『出て行け』と言わねばならぬ。』」

つまり、

「明白に、誠実に、そして直接本人に伝えなくてはならない。」

私はまったくドウンガの言っていることが正しいと思う。私も何年か前に日本の科学の世界で似たような場面に出くわして、私も似たような行動に当然出たことがあったが、その日本人にははつきり言つて全く理解されなかつたね。逆に不必要に根にまでもたれる始末だつた。たぶん、それは日本人のアカデミック世界にはドウンガが語っている意味のプロ根性が欠除しているからだろうが、他にも同じようなことを思った人もいることだろうね。サッカーのプロの世界のリーグですらドウンガの言っていることの意味はなかなか日本人には伝わらないのだから、今だ完全にプロ化していない大学や研究所の世界の人たちには伝わらないのも当然と言えば当然なんだがね。

一般に、ドウンガがこのような行動に出た場合、典型的な日本人の受け取り方とは次のようなものだと思ふ。誠実に直接意見されたその日本人は、

「まずどうして自分がこんなことを言われなくてはならないのか？」と感じ、

「きつと相手は自分に何がしかの悪意や敵意があるのだろう。自分の能力や立場に対する嫉妬から来ているに違いない。」

「というような反応や受け取り方をするだろうね。」

しかし、ドウンガや私に言わせれば、これは単に日本人の世界に例をみない特有な性格のなせることだってね。要するに、一言で言えば、日本人は非常に幼いつていうことだね。だから、ちょっとでもほめられると有頂天になり、逆にけなされると今度は相手に悪意や敵意があると錯覚するということだからね。おこちゃま、なんだよ。自分のママやかーちゃん以外に自分の思い通りにしてくれるものなんてこの世にはいないのだ。

この点、私はドウンガが今持つてしていることは、かつて進駐軍のマッカーサーが

「日本人の精神年齢は12歳だ。」

つて言ったというのとまったく同じことを言っているのではないかと私には思えるのだ。事実、第二次世界大戦に至るまでにとった日本人の行動、つまり日本軍とマスコミの行動は、まったく日本代表がワールドカップ出場を決めたときに取った行動と非常に似通った行動だからね。つまりちよつとしたことで浮かれ、有頂天になり、過信し、相手をなめ、

やるべき準備を怠った。日本の海軍も硫黄島の激戦で勝ち、有頂天になった。そしてマツカーサー率いる米海軍をなめた。ミッドウエー海戦で負け、そして、カエル飛び作戦、沖縄上陸と敗戦を強いられた。戦争は良くない。両者に多大な損害を与える。しかし、その原因を突き詰めれば、実は日本人のこういった性格の結果だったとも言えるのではないか。私にはそう見えるね。

マスコミがたいしたことでもないことをあおり、大騒ぎする。そして日本人はそれを過信して有頂天になり油断する。準備も怠る。こうして無謀な行動に出た結果今度は負けると、180度反対に出て、悲観する。しかし、やっぱりその原因は自分にあるとは考えない。バブル崩壊のときもこれとまったく同じことだったのは皆さん良く知っているだろう。この日本人の習性はサッカーを通じて今も出ている、これでは何ごとにも最後には負けるとドウंगाは言っているわけなのだ。

日本の選手には気合いが足りない

ここでドウंगाは今度は日本人キャプテンの問題を語る。この部分も非常に重要だと私は感じるね。中田他すべてのサッカー選手が読んでおくべきところだね。

「日本では選手どうしが反目し合ったり、メディアとやり合ったりすることはまず考えられない。その分だけキャプテンの仕事は少なくてすむ。日本でキャプテンに求められる

のは、まず選手にやる気を出させ、集中させ、試合ですべきことを思い出させることだ。」
それでも日本人選手に勝つことを意識させることの難しさを言っている。

「ジユビロ磐田でもっとも難しいと感じたのは、若い選手たちに、絶対に勝ちたいという怒りにも似た闘争心をいつも100%発揮させることだった。」

これは、今の鹿島アントラーズにもジユビロにも言えることだね。優勝候補なのに、3試合も引き分けなんて、おまえら勝つ気あるのかってドウンガなら激怒するだろうね。チームの中でだれも憤慨したり怒るやつがいなければ、そのチームはずっとちんたらやりつづけるものなのだ。少なくともキャプテンはこの役割を果すべきだとドウンガは言っているわけだね。

さらに特に若い人への接し方が大事で、うまく行って有頂天になっている時には、そんなことでは成長がないとはつきり伝え、新たなモチベーションを与えるべきだと言う。そしてさらに

「もうひとつ気になることがある。日本の選手を見てみると、自分のことばかり気にしていて、周囲にあまり注意を払っていないように感じることもあるのだ。だが周囲の人がうまくいかなければ、自分も試合に勝つことができない。サッカーはサポートをし合うスポーツなのだ。」

これはたぶん、中村や中田のことを念頭に置いているのだろうね。中村や中田など日本

人選手は自分は良くやったが試合は勝てなかったというものが多すぎる。これではいけないとドウंगाは言うわけだ。その原因を探し、次までにすぐに修正せよってね。こういう裏方の仕事もキャプテンの仕事、セネガルと試合をしたらはいおさらばっていうのではないよってドウंगाは言っているんだと私は思う。

権利と義務は表裏一体だ

ここでドウंगाはサッカーを取り上げ、権利と義務は表裏一体のものだという当然のことを語る。しかし何ごともおの当然なことが出来ていないのが今の日本人なんだと私は思う。ここも日本人にはぜひ読んでもらいたい部分だね。

今朝もある番組で取り上げられていたが、朝7時から9時まで通行止めとあれば、それをドライバーは守るのが当然の義務だろうね。車を運転する権利を得る以上、そのためのルールや標識を読む力はドライバーの義務である。標識はドライバーに科せられた義務を書いている。しかし、今の日本人の多くはこれを理解しない。だから、ドライブ禁止時間もそつちのけで侵入禁止地域も入って来る。もつとも、かなり平和的なアメリカだったとしても侵入禁止地域に入ってきたら、警察にすぐにピストルを向けられて手錠をかけられないとも限らないがね。ルール無視して人に害加えるのは一種のテロ行為と見なされるからね。

これは会社や研究所であれば、勤務時間中にはしっかりと仕事することに対応するだろうし、大学であれば、時間中は学生ならしっかりと勉強することだろうし、教師ならしっかりと教えたり研究することにあたるだろう。しかし、これも世のいろんな掲示板を見れば明らかのように、時間を問わず書き込んで遊んでいる始末だ。こういうのは、学生の権利と義務の問題であり、教師の権利と義務の問題だ。学校や会社や研究所の施設を自由に使える権利を獲得した以上、それはその目的のために使うのがその義務というものだろう。まあ、こういうことが日本では滅茶苦茶になっているということだね。そればかりか、その指導者も学生や職員にプレッシャーをかけることがない。最近我家のEPOにもアクセス解析をつけてちよつと調べてみているが、一番見に来るのは勤務中の大学や研究所からだ。これじゃ、プロ意識ゼロというものだね。

ドウंगाは言う。

「べつにサッカーに限らず、我々は生きる権利や健康である権利、教育を受ける権利、そして確かな自由を持っている。だが自分の権利もある一線で終わり、それを超えると他人の権利が始まる。たとえば隣の人には眠る権利があり、ある時刻以降は大きな音をたてることは許されない。私のパーティーを開く権利はここで終わる。」

「こうした考えはグループで行うスポーツではことに重要になる。互いの権利を認め合わなければ、そのグループはけっしてうまくはいかない。」

これはたぶんグラウンドの上だけでなく、私生活でも他の選手や若い選手を自分の都合に合わせて利用しようというタイプの選手のことを言っているのだろうね。

いやー、実にいいことをダウンガは言うね。私もまったくそう思う。

トライもせずに犯したミス、それは汚いミスだ

ここでダウンガがブラジルの選手たち、ジユビロの選手たちにもよくする話をまとめている。

「私はこれまで、私と同じ技量、才能のある選手に、勇気と意志の強さによって勝ってきた。たとえ技量や才能で劣っていたとしても諦めず、そんなときこそ確固たる意志の力を信じてきた。常に勝者は敗者以上のものを、何か持っている。技量や才能が同じレベルだとしたら、その何かとは、メンタリティー、考え方しかない。」

ダウンガはこのメンタリティーとはどんなものかまとめている。

「難しければ難しい程、痛みが伴えば伴う程、犠牲が大きければ大きい程、それをやり遂げたあとの喜びは大きくなる。困難を乗り越えて得たものの価値は、それだけ高まるのだ。」

これこそ、いわゆるハイリスク、ハイリターンの意味をダウンガ流に言っているわけさ。

「トライもせずにミスすることは許されない。私に言わせればそれは怠慢による、汚い

ミスだ。もしトライして間違っただならそれは仕方がない。ミスも同じものを3回、4回と犯すのは知的ではない。だが10回、100回、1000回と違う方法を試みてまだ間違っていたら、それは知的なミスだといふべきだろう。知的な人間だからできる間違いというのもある。最初の言葉が『難しい』『知らない』『できない』では、何もできないのは当たり前だ。」

この言葉にダウンガとずっといっしょに戦ってきたベベトの特徴が良く分かるといふものだ。アメリカではベベトはロマーリオと組んでいた。フランスではベベトはロナウドと組んだ。アメリカ大会の後ベベトは日本に一時やってきたことがある。そんな時対戦したマリノスのゴールキーパーの川口が言っていたことがある。

「ベベトは試合の中で一度たりとも同じ蹴り方のシュートをしない。」

つまり、川口に言わせれば、ベベトは常に異なるやり方でシュートを狙って来るといふことだ。あるときはインやアウトに回転をつけて、今度はチョップキック、今度はボレー、常にキーパーの意表をついてくるということだ。これこそダウンガの言う知的なトライである。それで失敗してもそれは知的な間違いだったということになるからね。

もうひとつサッカーの話をダウンガはする。それはサッカーは普通のスポーツとは違うということだ。

「サッカーが職業として優れている、あるいは劣っているということではない。単純に

違うという意味だ。たとえば世界中のほとんどすべての人が、サッカーについて何かを話したり、遊びでボールを蹴ったりしたことがある。どんな職業の人でもサッカーに触れたことがある。だが私は一度も医者が手術に使うメスを手にしたことがない。」

「サッカーは世界中で知られ、理解され、共通のコミュニケーションの担い手でもある。それはサッカーが、見たまま、感じたままのもので、その感覚に対抗できるものがほかにないからだ。初めてサッカーを見た人も、たちまちまわりの人に影響され、結局巻き込まれていく。我々はそういうスポーツを職業にしているのだ、というような話をして、皆の、そして私自身のモチベーションを高めていく。」

いやー、ダウンがはさすがだね。キャプテンは医者のようなものだ、という理由が分かる気がするよ。こうやって選手たちの心理状態をうまくコントロールしていくわけなんだね。また人はトリアルアンドエラー（試行錯誤）で進歩していくものと言われるが、その試行錯誤の意味も実に明解だ。いろんな違う試行を試みて失敗するならそれは知的な失敗、知的な試行錯誤。だが、同じことを繰り返すのは馬鹿な試行錯誤だというわけだ。ましてや失敗を恐れて何もせずというのは何も成長しない、しかもっと悪いのは失敗を恐れるがために重大な失敗がひき起こされるといふことだとダウンが考えているわけだ。しかし、これはサッカーに限らず、科学でも何でも言える真実だと私は思う。

生きるものと生きながらえるのは違う

ここでダウンガは自分の老後や引退後のことを語っている。なにより人間にはスピリットが一番大事なことだと説く。

昔と比べて、科学知識の進歩、トレーニング法の進歩、トレーニング機器の進歩、などいろんな理由で選手生命は伸びてきている。そして30歳なら昔にはもう引退だったが、いまでは30代でも立派に戦える。だから自分も立派にフランスで戦えるのだというわけだ。そして、何ごとにも物事は考え方の問題、心の問題なのだとダウンガは言う。

「それは考え方の問題、心の問題である。年齢が若くても老人のような考え方をする人もいるし、歳とっても自分のやることに幸せを感じている人は多い。生きると言うことと、生きながらえるということは違う。」

「やがて私にも引退を考えるときは来るだろう。重要なのはスピリットだ。魂の奥の部分で疲れた、歳とったと感じたら、私は潔くユニフォームを脱ぐ。だが、私にはまだスピリットがある。」

いやー、実に素晴らしい。こうやってダウンガはフランス・ワールドカップまで自分のモチベーションを高め、戦い抜いたというわけだ。

すべては神のみぞ知る…

ここでアメリカワールドカップの時とは違い、今回のフランス・ワールドカップでは準備に十分でなかった点に気掛かりがあるとダウンガは一抹の不安があると言ってる。そこでむしろチームとしての完成度を高めるためには予選で苦労したほうが良いのだと言う。あまりに何ごとも順調だとイタリア大会の時を思い出す。ブラジルは予選を戦っていない。だから実践トレーニングが不足しているとダウンガは感じている。ライバルのイタリア、ドイツ、アルゼンチン、イングランドなど優勝経験のある国はすべて優勝候補だ。ブラジルは強いかも知れないがそれだけでは必ずしも頂点に立つわけではない。これは歴史が証明している。このワールドカップ史上初の2連破を目指していくら準備しても準備し過ぎることはないとダウンガは言う。

自分の強豪ブラジル代表に対してもこれほどまでに執拗に準備を語るダウンガだからこそ、フランス・ワールドカップ出場を決めた日本代表にもまったく同じことを言っていたということなんだね。まあ、ダウンガからすれば、ワールドカップを4回優勝したこれほどのチームでもこれほどの練習をし、心構えをし、準備しているのだから、初出場でいい気になり、自分たちを過信し、浮かれ、何の準備もせずにいる日本人に非常に腹立たしい気分を感じていたんだと私は思う。しかしこうしてわざわざ本まで出して日本人にその意味を教えてくれたダウンガという人物は非常に素晴らしい人物だと私は思うんだがね。

あとがき サッカーの話は尽きないけれど

このあとがきで、ドウンガはブラジル人の特徴をまとめている。ブラジル人は話好きであり、国民1億5千万人がサッカー監督であること、エモーションとパッションについて語る。

「サッカーとはエモーションであり、パッションだ。肌で、そして心で感じるべきもので、常に論理的であるとは限らない。そして私もまたエモーションとパッションの人間だ。たいして思慮深くもなく、本能で行動してしまうことがある。言葉も、態度も、自然にわき上がり、あふれ出るようなものだ。あとで冷静になって振り返ってみると、なぜあんなことを言ったのだろう、なぜあんな態度をとってしまったのだろうと、後悔することも多い。でも、だからこそサッカーは面白いのだ。」

「サッカーはシンプルなスポーツだ。ボールを持つている者だけがゴールすることができる。彼にはプレーを自由に創造する権利がある。ボールを持っていない者はまずボールを奪わなければならない。それをしなければ何も始まらない。サッカーはたったそれだけのことを、90分間繰り返し行っているようなものだ。サッカーがもっと複雑に見えたら、それは我々人間がそうしているからにすぎない。複雑にしようと思ってそうしているわけではない。最初はシンプルなプレーをしていたのが、それが完璧になってゆくにつれ、必要に応じて難度の高いプレーを獲得していく。サッカーは人生と同じなのだ。」

そして最後に次のように締めくくる。

「そのなかで、勝ちたいという強い気持ちがあれば、グラウンドでだれかを怒鳴る必要などはない。エモーションとパッションが、そういう行動に私を走らせる。ワールドカップへの熱意、日本でのプレー、そして日本のサッカー界へのいくつかの提言。すべては私のエモーションとパッションから生まれたのだ。」

いやー、実に面白い本だった。私はそう思う。だから時間を裂いてまでわざわざこんな解説をしているのだ。これも私のエモーションとパッションのなせる業なのだ。

あとがき

あるとき、私はダウンガの言葉をテレビかどこかで聞いたことがある。それは次のような意味の言葉だった。

「日本には歴史的文化的問題があり、自分のようなリーダーは育たない仕組みになっている。」

私はこの言葉を聞いて以来、このダウンガという選手に非常に好感を持ったのだ。同時に非常に興味を引かれたんだよ。なぜなら実は私はそういう日本人にはまれな気質を持った日本人サッカー選手だったからだ。もちろん、ダウンガより先に私は生まれていた。

私は、高校生の頃、甲府南高校という進学校に入った。まわりの選手は皆、進学希望で塾に行ったり、予備校にいたりしてろくに練習もしないようなチームで、選手もサッカーを高校までろくにやったことがないような選手がほとんどだった。一年生の時には練習に参加するのはいつも8人くらいで、全体で11人しかいないようなチームだった。それは先輩たちは練習がちょっとでも厳しくなれば監督と喧嘩してやめてしまうような連中だったからだ。

一方、私自身は甲府南中学全盛期のレギュラーの一人だった。5つある県大会で3つ優勝、関東大会と全国大会の予選ではともに韮崎に引き分け、抽選負けやPK戦負けだった。

この常勝軍団からきた私はこの進学校でも負けるのは嫌だった。だからそのためにはキャ

ブテンとしてあらゆる方法を試した。当然ダウンガが言ったように試合中喝を入れるために怒鳴ったり、あらゆる注意をして、お互いにサポートし合って強くなっていった。この時期の我々のサッカーチームを見た友人は、「井口の怒鳴り声ばかり聞こえる。まるでワシマンチームだ。」と言うほどだった。

しかし2年生の秋には合宿所すらある葦崎を倒すこともできるほどになった。我々の結束は固くなり、この1975年にはベストフォーの常連になった。この理由は、私もダウンガが言ったようなことをやっていたからだ。グラウンドの上とそれ以外はまったく別物なのだ。だから皆非常に仲が良かった。この年に葦崎は後にも先にも初めての全国優勝を夏のインターハイであげたのだ。

しかし残念ながら私が現役選手の時代にはJリーグのようなプロサッカーの道はなく、私の活躍の道はなかった。そして確かに大学サッカーの道もあったが、私は物理の道に転向した。だから、ダウンガタイプがいたことを知っているのは個人的に私と一っしょにプレーしたことのあるチームメイトだけだろう。この辺のことは私の自伝の一部に書いた通りだ。

時代が進めば日本にも私のような気質の人間の活躍の場が来るのかも知れないが、現状を見る限りではサッカーにおいてもそうというのはダウンガが言うようにまだまだ先の話のようだ。サッカーに限らず、社会一般、科学者社会、まだまだ日本社会は幼い。私もドウ

ンガとまったく同じ問題を見ているのだ。

私が日本社会に対して「三セクター分立の概念」（太陽書房）を書き警鐘をならしたのも、大学の掲示板で遊んでいたり気楽に科研費を使っている一部の大学人を直接批判したのも、科学界に対して「何が科学をつぶすのか」（太陽書房）を書いて警鐘をならしたのも、すべてはこのエモーションとパッションのなせる業。私もやっぱりサッカーマンのまななんだね。

井口和基 2004年2月、阿南にて

著者略歴

1957年10月13日山梨県甲府市生。大学に進むまで山梨の高校サッカーのトップレベルの選手、変幻自在のパスセンスと一人でゴールまで行くドリブルの名手として有名。今も四千回ボールリフティングできる技量を持つ。東理大理工物理卒、阪大基礎工修士卒博士終了。住友セメント(株)中央研勤務。退社後米国ユタ大学物理学部留学。1990年卒、Ph. D。1990年帰国後、富士通(株)計算科学研究センター研究員。(特)理研基礎科学特別研究員を経て、現在フリーランス物理学者。趣味は、スポーツと読書。家族は和子、維作、条時の三人。

著者の本と購入方法

これまでに出版された著書には、以下のものがある。

「三セクター分立の概念」(太陽書房、2001年12月)、「何が科学をつぶすのか？」(太陽書房、2002年8月)、「物理お宅博士のスポーツ観戦記」ソルトレイクオリンピック2002」(太陽書房、2003年4月)、「物理お宅博士のスポーツ観戦記」日韓ワールドカップ2002」(太陽書房、2003年5月)、「フラーとカウフマンの世界」(太陽書房、2004年1月)。

【太陽書房の出版物の購入方法について】

オンライン注文 (<http://www.taiyo-g.com>)、もしくは

郵便番号 950 0851 新潟県新潟市新石山 1 9 3 太陽書房、

電話・FAX 025 277 5780

に直接ご注文ください。

サムライサッカーをめぐる

著者 井口和基

(c) 2004 Kazumoto Iguchi. e-Printed in Japan.

2004年4月28日初版発行。定価500円(税込)

発行者 井口和基

発行所 KazumotoIguchi, Inc.

発売所 KazumotoIguchi, Inc.

〒 774 0003 徳島県阿南市畷町新はり 70 3

<http://www.stannet.ne.jp/kazumoto>

e-mail: kazumoto@stannet.ne.jp

【注意】

本書の内容を無断で複製・複製・放送などすることはかたくお断りいたします。
著作者に無断でレンタルおよび販売することを禁じます。

【シェアブック】

本書はシェアブックです。ここでいう「シェアブック」とは、読者が本書を
実際にお読みになり、読者自らの価値判断によって定価以内の料金を支払う
という本のことです。読者のご好意に依存する本です。

【お支払先】

e-bank □座支店番号 207 □座番号 1447394 □座名称 井口和基様

